

御崎谷遺跡  
小屋谷古墳群

昭和 56 年 3 月

島根県八束郡八雲村教育委員会

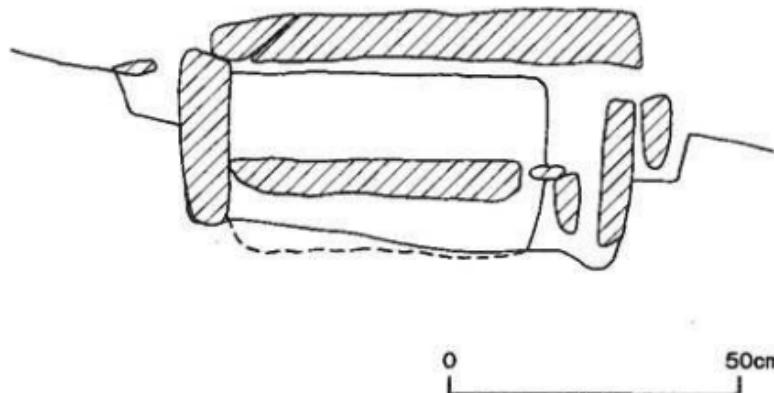
正 誤 表

P. 2 本文中（第3図）→（ポケット図）

P. 21 第4図 箱式石棺実測図

断面図を下図に訂正します。

L-61.00m



## 例　　言

1. 本調査報告書は、「日吉台サニーハイツ造成工事」に伴い、山陰住研株式会社からの依頼を受け、昭和35年10月～翌年3月まで八雲村教育委員会が調査したものである。
2. 本調査は、八雲村教育委員会嘱託宮本徳昭を担当者として、島根大学学生房宗寿雄の補助を得て行い、事務局は八雲村教育委員会社会教育主事三好淳が担当した。
3. 現場作業については、来間組の絶大なるご協力と地元石倉吉郎・引野宗太郎・引野慎代・日吉百合子・三好澄江・山崎恵子の方々のご協力を賜った。また、期間・費用の変更について山陰住研株式会社の絶大なるご協力を賜った。
4. 遺物整理は、宮本・房宗が行い、遺物の実測・トレースは房宗があたり、写真撮影と編集は宮本が行った。
5. 本調査は、県文化課埋蔵文化財係職員各氏・県立八雲立つ風土記の丘資料館三宅博士氏をはじめ多くの方のご指導を賜り、遺物については、島根大学名誉教授山本清先生・九州歴史資料館高倉洋彰氏にご指導を賜った。
6. 本調査にかかわる資料等は、八雲村教育委員会で保管している。

## 目 次

調査にいたった経緯とその背景(宮本).....	1
位置と環境(宮本).....	2
御崎谷遺跡 .....	4
調査結果 .....	4
(1)調査の方法と状況(宮本).....	4
(2)遺 物(房宗).....	7
まとめ (宮本).....	14
小屋谷古墳群 .....	15
調査結果.....	15
遺 構(宮本).....	15
1. 1 号 墳 .....	15
2. 壺 棺 .....	19
3. 箱式石棺 .....	20
4. 2 号 墳 .....	22
5. 3 号 墳 .....	26
遺 物(宮本・房宗).....	30
まとめ (宮本・房宗).....	36

## 図 版 目 次

### 位置と環境

第1図 八雲村の位置	2
第2図 周辺の遺跡(「八雲村の遺跡」追加)	3

### 御崎谷遺跡

第1図 グリット配図図	5
第2図 御崎谷遺跡出土遺物実測図(1)	11
第3図 御崎谷遺跡出土遺物実測図(2)	12
第4図 御崎谷遺跡出土遺物実測図(3)	13
第5図 御崎谷遺跡出土遺物実測図(4)	14

### 小屋谷古墳群

第1図 1号墳関連実測図並びに1号墳土層実測図	17
第2図 1号墳主体部(上)同祭祀実測図	19
第3図 磁棺掘り方実測図	20
第4図 箱式石棺実測図	21
第5図 箱式石棺上層実測図	22
第6図 2・3号墳実測図並びに2号墳土層実測図	23
第7図 2号墳主体部(上)同祭祀跡実測図	25
第8図 3号墳土層実測図	27
第9図 3号墳主体部実測図	28
第10図 3号墳出土刀子鏡拓影	30
第11図 3号墳出土刀子実測図	31
第12図 1号墳出土壺棺略実測図	31
第13図 小屋谷古墳群出土土器実測図(1)	34
第14図 小屋谷古墳群出土土器実測図(2)	35
御崎谷遺跡・小屋谷古墳群周辺図	ポケット図

## 写 真 目 次

御崎谷遺跡・小屋谷古墳群遺景（北から）	39
御崎谷遺跡発掘前（北西から）	40
御崎谷遺跡発掘後（北西から）	40
御崎谷遺跡出土遺物(1)	41
御崎谷遺跡出土遺物(2)	42
御崎谷遺跡出土遺物(3)	43
御崎谷遺跡出土遺物(4)	44
小屋谷古墳群発掘前全景（東から）	45
小屋谷古墳群発掘後全景（西から）	46
1(手前) 3号墳発掘前（北西から）	47
1号墳主体部（北西から）	47
壺棺－表上除去後－（北西から）	48
壺棺底部（北西から）	48
壺棺掘り方（北西から）	48
箱式石棺遠景（北から）	49
箱式石棺表上除去後（北東から）	49
箱式石棺蓋石除去後（北東から）	50
箱式石棺掘り方（北東から）	50
2号墳発掘後（北西から）	51
2号墳第1(土)・第2主体部（北西から）	51
3号墳発掘前（北西から）	52
3号墳発掘後－主体部検出前－（北西から）	52
3号墳第1(手前) 2主体部（南東から）	53
3号墳第1主体部遺物検出状況（北西から）	53
3号墳第1主体部木棺部分検出状況（北西から）	54
3号墳第1主体部掘り方加工痕検出状況	54
小屋谷古墳群出土土師器・須恵器・壺棺	55
小屋谷 3号墳出土品	56

## 調査にいたった経緯とその背景

昭和49年度当初、県土地利用調整幹事会に民間の宅地造成工事計画が資料として提出され、同年6月20日に県教育庁文化課と八雲村教育委員会が分布調査を実施した結果、古墳1基・遺物散布地3箇所を確認し、それぞれ土地所有者からの届け出により周知の遺跡となった。その後の県土地利用調整会議での協議の中で、八雲村に専門職員がないことや、原因者負担による費用等の面から開発事業は中断された。

その後開発業者が変わり、昭和55年3月に再度開発事業が浮上してきたが、昭和55年4月から八雲村に嘱託の専門職員が入り、宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う増福寺古墳群の発掘調査が計画実施されていたため、この発掘調査の現地調査終了後直ちに実施するよう協議した。

同年9月22日に県教育庁文化課の指導を受け、同年同月30日に開発業者との協議のうえ「古墳2基・散布地1箇所」ということで文化財保護法の手続を各々完了し、同年10月1日委託契約を締結し、同年同月20日から現地調査に入った。

現地調査に入ってからは、同年11月7日と15日に県教育庁文化課の現地指導を受け、その間11日には県教育庁文化課・村教育委員会・開発業者の三者による協議を行い、11月29日に3基目の古墳を確認した。その後昭和56年2月10日の現地調査終了まで、計6回の県教育庁文化課の現地指導を願いながら、あわせて開発業者との協議を随時行った。

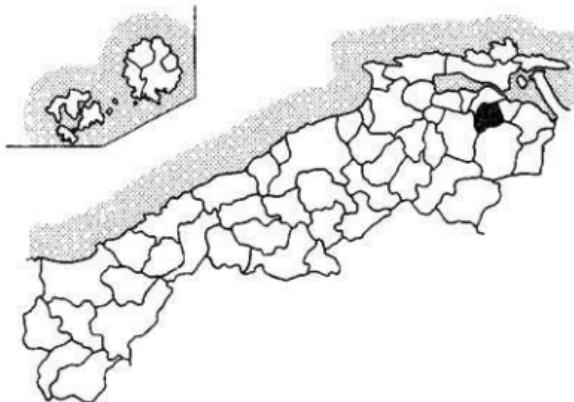
その後、以前から進めていた報告書作成作業に入り、一応の報告書作成を終了することができた。

## 位置と環境

八雲村は松江市の南に位置し、意宇川上、中流域にあたる。周囲は山を境として、松江市・東出雲町・広瀬町・大東町に囲まれ（第1図）、総面積55.41km<sup>2</sup>の80%以上は山林であるが、北の入口には旧意宇川により形成された日吉の平野部がある。その南には八雲村第一の平野部が、3本の川により形成され、各川沿いに小耕地が開けている。

八雲村の遺跡は平野部を取り囲むように集中し、3本の川の中流域まで分布している。現在確認されている遺跡の数は250余あるが、近年の急激な開発に伴う分布調査により、この平野部周辺に集中し、増加の一途をたどっている（第2図）。

雨乞山から北へ伸びる丘陵上に小屋谷古墳群、その東の扇状地形に御崎谷遺跡があり、北に日吉の平野を見下ろしている（第3図）。小屋谷古墳群は南に雨乞山の祭祀遺跡を負い、北東に八雲西百塚古墳群、北西に落井古墳群・同横穴群・岩坂陵墓参考地や神納古墳群を一望し、北の松江市境の山越しには意宇平野・茶臼山・岡原丘陵等を眺望することができる。このような立地の中で、特に日吉の平野を取り囲む遺跡群の総合的な検討をすることは、近年の開発に対応するうえで重要な課題であろう。



第1図 八雲村の位置



第2図 周辺の遺跡（「八雲村の遺跡」追加）

## 御 崎 谷 遺 跡

御崎谷遺跡は小屋谷古墳の東、北へ開く傾斜のつよい扇状地形の水田中にあった(ポケット図)。標高18~30mの扇状地形であるが、昭和50年頃最上部と中段部以下を重機による造成工事が行われており、遺物は中段部以下に多量に分布しているが遺構はその間に遺存していると予見して発掘調査に入った。

### 調 査 結 果

#### (1) 調査の方法と状況

調査範囲が広いため、基準点(工事用)より磁北を基準線として10m四方の大分割をした。

1辺2mのグリッドを設定し、東西間20m毎、南北間16m毎の子鳥式とした(第1図)。

17箇所のグリッド設定を行ったが、ほとんど湧水があり発掘中の層序確認が困難をきたした。1箇所は谷の奥で、湧水や地盤の安定感がなく途中で中止した。

2箇所で遺構と考えられるものを検出したが、1箇所だけ拡張した。いずれも明瞭なる遺構ではなく、また工事の中では盛土により永久的に残るという判断からである。

以下、グリッド毎に状況を説明していく。

No01 第1段目の谷面の水田に位置し、1.10mまで掘下げた。床土下2層から、須恵器・土師器・かまどが破片で数点ずつ混在して出土した。

No02 本調査中で最も谷頭の水田に位置し、約1.70mまで掘下げたが、完全な溝田で丸木等を入れ人が沈みにくいようにしてあった。遺物は1点も出土せず、壁面が水分と砂質土層が多いため土層実測もできなかった。

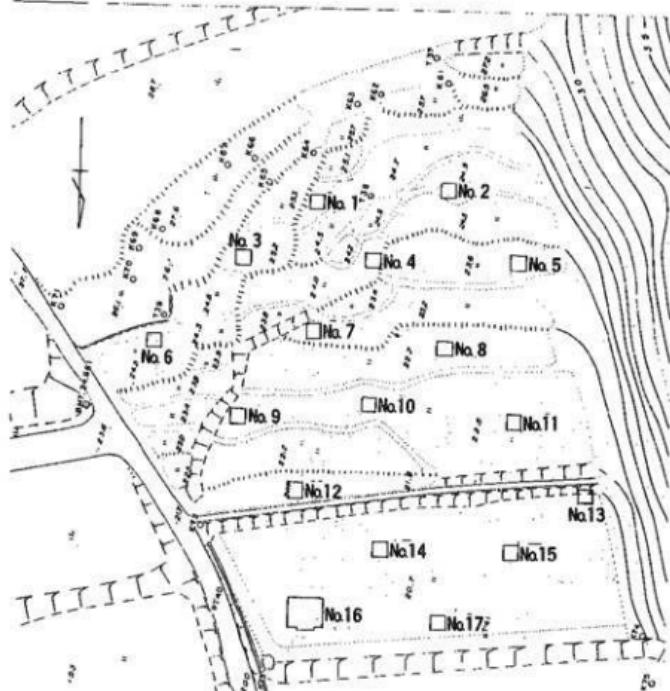
No03 斜面の本調査中で最も高所の旧水田に位置し、約1.10mまで掘下げた。床土下2層から、須恵器片数点と土師器片が多数混在して出土した。

No04 第1段目の各々斜面の接点の水田に位置し、約1.30mまで掘下げた。床土下第3・4層から、須恵器片多数と土師器片が混在して出土した。

No05 第2段目の谷面の水田に位置し、約1.20mまで掘下げたが、須恵器片が1点出土しただけである。

No06 本遺跡所在の扇状地形のほぼ中央の旧水田に位置し、約1.25mまで掘下げたが、磁器が1点出土しただけである。深さ約0.55~0.80mで地山を検出した。

No07 第2段目の谷と斜面の接点の水田に位置し、約0.85mの地山まで掘下げた。グリッド中央よりやや偏し、地山直上層より径0.40m、深さ0.65mのピット1基が検出



第1図 グリット配設図

され、地山面で $0.85 \times 0.95 \times 0.95$ mの平面プラン方形で深さ0.50mの土壌の一隅を貫いていた。床土下と地山直上層との間層から、須恵器片・土師器片が多数出土したが、上層の方が須恵器が多かった。土錐1点が上層より出土している。

No08 第3段目の谷面の水田中央に位置し、約1.85mまで掘下げた。須恵器片多数・土師器片数点・炭火物数点・棒状木片1点が混在して出土した。

No09 第3段目の谷面の水田で斜面ぎわに位置し、約0.85mまで掘下げた。須恵器片多数・土師器片数点が混在して出土した。

No10 第3段目の谷面の水田中央に位置し、約1.10mまで掘下げた。須恵器片多数・土師器片数点・磁器片数点が混在して出土した。土錐1点が、床土直下より出土した。

No11 第3段目の谷面の水田部西に位置し、約2.00mまで掘下げた。土師器片数点・須恵器片数点が混在して出土した。櫛基部1点・焼木片数点・薄板2枚・厚板1枚が出土している。同形同種の土師質高坏脚部が、2層の間を出土していることから層序は混乱していると考えられる。

- No12 第3段目の谷面の水田部東に位置し、約1.50mまで掘下げたが、約1.20m前後から丸みのある大石をかなり含んでいた。床土下上層部に土師器片が多數、下層部に須恵器片が多數出土したが、下層より陶磁器片が数点出土していることから、層序は混乱している。焼木片が2点出土している。
- No13 第3段面の谷を圃場整備した水田面の南西端に位置し、約0.65mまで掘下げたが、隅では深さ0.20mで地山となり、地山は急傾斜していた。出土遺物はなかった。
- No14 圃場整備水田面中央に位置し、約1.65mまで掘下げたが、床土直下層より須恵器片が数点出土しただけである。約0.90m以下は、大石を含みその下は砂利層となった。
- No15 圃場整備水田面西部に位置し、約1.50mまで掘下げた。床土直下層より須恵器片多數と共に雄土馬1点、その下の砂利層より土師器片数点と須恵器片多數・薄板1枚（No11同種）が出土した。水田面下約0.90mに、旧水田層が残っていた。
- No16 圃場整備水田面北東端に位置し、約1.00mまで掘下げたが遺構と考えられるものを検出し拡張した。南に1グリッド拡張し、その東西に各1.00m、北に0.70mに拡張した。深さはNo17を参考とした時、遺構と考えられるものがないこと、盛土といふことから掘下げなかった。
- 遺構と推定したものは、角の丸い石のレベルで3グループと土層から2グループに分けられたが、詳細を検討した結果、圃場整備時のもの2グループと、旧水田部の時に付随する石列（グループ）と考えてほぼ誤りないであろう。
- 遺構は圃場整備の関係から、土師器片・須恵器片が多量に混在しており、小さい羽子板状木片1点が検出された。破片は他に比べ大きく、他に見られない器種が多く出土した。
- No17 圃場整備水田面中央北に位置し、約1.70mまで掘下げた。No16同様に旧水田面が残存していた。遺物もNo16同様の出土状況であるが、焼木塊1点と石器状のもの1点が出土している。

以上グリッド別にその状況を説明したが、No14～17の位置する下段の造成地や今回調査範囲の東端の作道東も散布地としての遺跡である。このことは、No14～17の位置する下段造成地の周囲にある溝等から、遺物が出土していることからもうかがえる。

本遺跡の状態は、湧水が激しいこと、No1・3・4・6・7の土層から判断すると、ある時期土砂崩壊により遺構が流れ、その結果として遺物堆積・散布と考えられる。遺物の量から考えて、かなり広範囲であり、一部は土馬の出土から考えて、旧湧水部分も旧遺跡と考えてほぼ誤りなかろう。

## (2) 遺 物

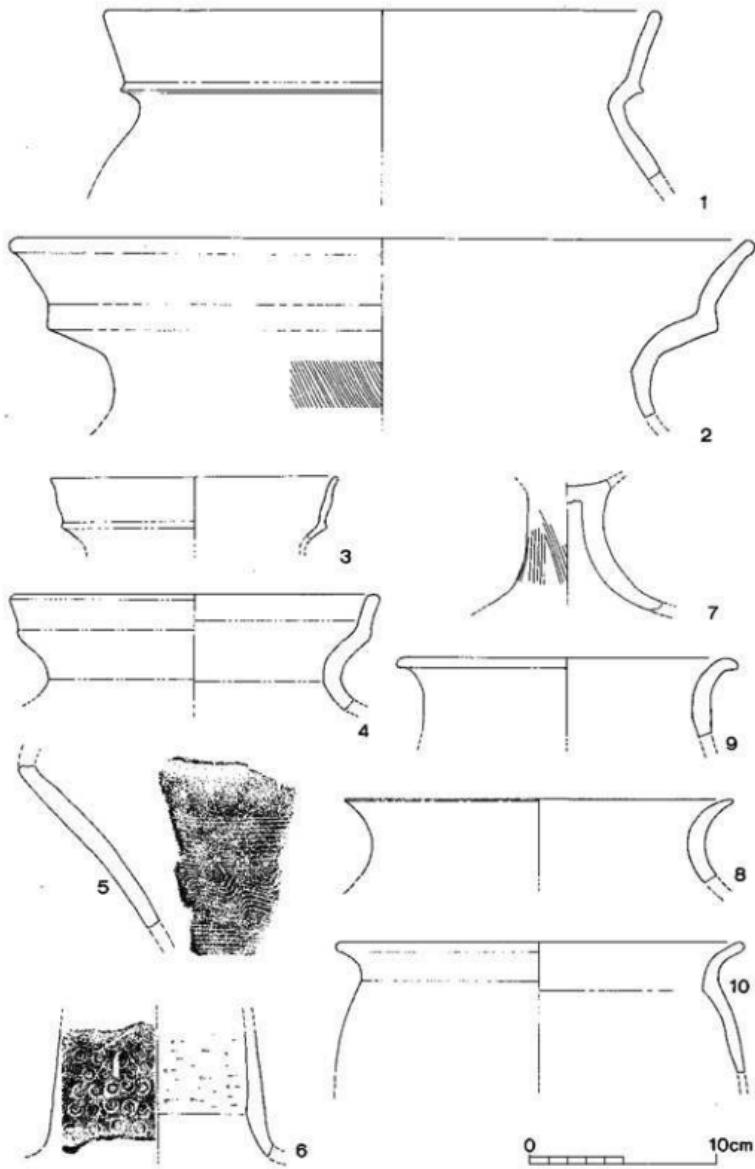
観 察 表

No.	器種・法量(cm)	成 形	調 整	胎 土・焼 成	備 考
1	壺。口径29.4。	段は小さいが、覗くくっきりと外方に突出。口縁は棒状で、端部は丸い。		細かく、ややゆるめ。砂粒をかなり含む。焼成良好で灰白色を呈する。	全面激しく風化しており、調整等不明。左右対称復元。
2	壺。口径39.2。	段は丸く純く、口縁も棒状の太く削いものである。	内面頸部以上横方向のなで、底部以下横方向の削りと思われる。	やや荒めでややゆるめ。砂粒・石英片を大量に含む。焼成良好で暗灰褐色を呈する。	全面かなりの風化をうけている。左右対称復元。
3	壺。	段は小さいが外方へくっきりと突出し、口縁は純くねりながら外反。		細かく、ややゆるめ。焼成良好で暗灰黃褐色を呈する。	全面風化のため調整不明。左右対称復元で、口径推定。
4	壺。口径19.5。	段の突出は見られず、純く折れ曲がるのみ。	内部口縁部に横方向のなでが見られる。	細かく、かなりゆらい。砂粒・石英片を大量に含む。焼成良好で灰褐色を呈する。	全面風化のため調整はとんど不明。左右対称復元。
5	壺体部(肩以下)		くし状工具による浅い施紋。	荒めでゆるめ。砂粒を多く含む。焼成良好で明灰褐色を呈する。	全面激しく風化しており、調整不明。
6	不明。	太い筒状をなす。	竹管紋を施すが、法則性は見られない。内面横方向のヘラ削りの後端などを施し、外縁は横方向のなでの後施紋。	同 上	全面風化。上下の確認なし。左右対称復元。
7	高环脚部。	器肉厚く、純い作り。	外周筒部に縦方向の荒い刷毛調整を施し、脚部には横方向のなでが見られる。	荒く、ゆるめで、多量の砂粒を含む。焼成良好で灰白褐色を呈する。	外面汚染。
8	壺。口径20.8。	丸く外反する単純口縁をもち、端部は尖り気味になる。		荒く、ややゆるめで、砂粒を多く含む。焼成良好で灰褐色を呈する。	全面風化のため調整不明。左右対称復元で、復元口径にやや不安有り。
9	壺。口径16.7。	丸く純く外反する単純口縁をもつ。	外面横方向のなでと思われる。	荒く、ゆるめで、砂粒を多く含む。焼成やや不良で暗灰黃褐色を呈する。	全面風化。左右対称復元。
10	壺。口径21.2。	比較的覗く外反する単純口縁をもち、体部はあまり広がりをもたない。		細かく、ゆるく、砂粒・石英片を多く含む。焼成良好で灰褐色を呈する。	全面風化のため調整不明。左右対称復元。
11	壺。口径18.7。	ゆるやかに折れ曲る単純口縁をもつ。		細かく、ややゆるめで、砂粒を少量含む。焼成良好で灰褐色を呈する。	同 上
12	高环。低径5.8。	内部の空洞にならない類のもの。	底面は未切りと思われ、他の残存部はなで調整と思われる。	やや荒く、ややゆるめで、砂粒を多く含む。焼成良好で灰褐色を呈する。	全面風化している。

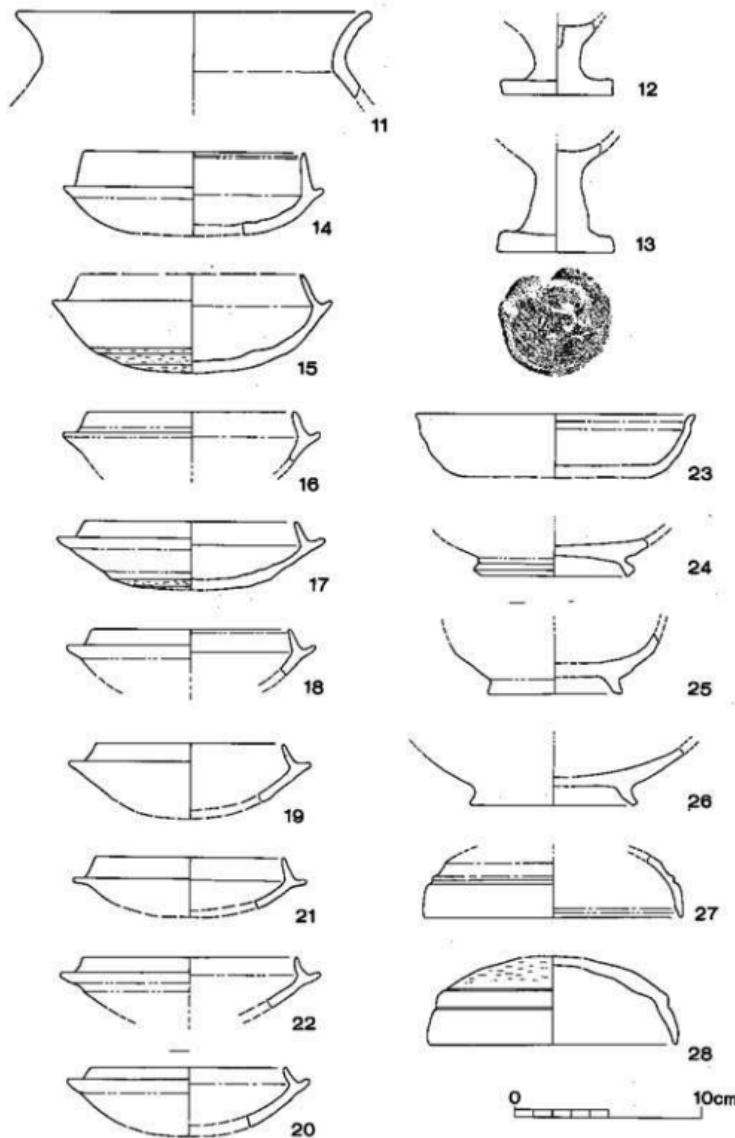
No.	器種・法量(cm)	成形	調整	胎土・焼成	備考
13	高环・底径6.1。	内部の空洞にならない類のもので、脚部が比較的高い。	裏面は糸切りで、他の部分にはなで調整を施す。	やや荒めでゆるく、砂粒を含む。焼成や不良で淡灰黃褐色を呈する。	
14	須恵器蓋環身部。口徑11.9。	受部はやや太めで、横斜め上方向に突出。直立に近い比較的高い口縁をもち、口盤はやや鍔めの有段となる。	内、外面共に回転なでが確認される。	細かく密で、若干の砂粒を含む。焼成良好で灰白を呈する。	左右対称復元。
15	須恵器蓋環身部。口徑11.8前後。	受部は細く斜め上に突出。口縁は内傾する比較的高いものである。	内面中央部に横なでが入る。外面底部は回転ヘラ削りで、他は回転なで。	細かく密で、砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	口縁欠くが、無段のものと思われる。左右対称復元。
16	須恵器蓋環身部。	受部は細く斜め上に突出。口縁は内傾する比較的低いものである。	残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒をあまり含まない。焼成良好で青灰色を呈する。	口縁推定。左右対称復元。
17	須恵器蓋環身部。口徑11.3。	受部は斜め横に伸び、口縁は内傾する比較的低いものである。	内面中央部に横なでが入る。外面底部は回転ヘラ削りで、他は回転なで。	細かく密で、少量の砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	左右対称復元。
18	須恵器蓋環身部。口徑10.5。	受部は細く、斜め横に突出。口縁は比較的立つ短いもの。	残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒をほとんど含まない。焼成良好で青灰白色を呈する。	同 上
19	須恵器蓋環身部。口徑9.9。	受部は横方向に突出し、口縁は内傾する短いもの。	内面は回転なで、外側も回転なでで底部付近に回転ヘラ削りを施す。	細かく密で、砂粒をほとんど含まない。焼成良好で灰白色を呈する。	同 上
20	須恵器蓋環身部。口徑10.4。	受部は斜め横に突出。口縁は内傾する短いもの。	残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒・石英片を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	同 上
21	須恵器蓋環身部。	受部は細く横方向へ突出し、口縁は比較的立つ短いもの。	同 上	細かく密で、砂粒を少量含む。焼成良好で灰白色を呈する。	口縫推定。頬に不安有り。左右対称復元。
22	須恵器蓋環身部。口徑11.4。	受部は細く横方向へ突出し、口縁は内傾する短いもの。	同 上	細かく密で、砂粒を少含む。焼成良好で暗灰白色を呈する。	左右対称復元。
23	須恵器蓋環身部。口徑14.8。	軽く外反する口縁を持つ。	同 上	細かくややゆるめで、砂粒をほとんど含まない。焼成良好で青灰色を呈する。	同 上
24	須恵器蓋環身部。口徑7.8。	底部中央に軽い凹面をもつ高台を有する。	内面底部に横なで。外面部底部に回転ヘラ削りを施し、他は全て回転なでを施す。	細かくややゆるめで、少砂の砂粒を含む。焼成良好で灰白色を呈する。	
25	須恵器蓋環身部。口徑7.0。	軽く外反する高台を有する。	内面底部横なでの他、残存部全面に回転などを施す。	細かく密で、少量の砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	左右対称復元。

No.	器種・法量(cm)	成形	調査	胎土・焼成	備考
26	須恵器蓋環身部、口径8.6。	外反する高台を有する。	内面底部横なで、外面底部回転ヘラ削りが見られ、他の残存部には回転なでを施す。	細かく密で、少量の砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	左右対称復元。
27	須恵器蓋环蓋部、口径13.8。	肩に一条の凹部と凸部が入る。口輪は直立氣味の短いもので、口唇は2段となっている。	残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒をあまり含まない。酸化しており、明灰褐色を呈する。	左右対称復元。口徑に不安有り。
28	須恵器蓋环蓋部、口径13.2。	肩に一条の突出部と、その上下に細い沈線をもつ。口唇は無段のもの。	外面肩より上に回転ヘラ削りが見られ、他の残存部には全て回転なでを施す。	細かくややゆるめで、砂粒を含む。焼成やや不良で、暗灰褐色を呈する。	左右対称復元。
29	須恵器蓋环蓋部、口径12.6。	肩には一条の突部をもち、1縁と明確に区分。口縁内端部付近に細い一条の沈線が入る。	残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、少量の砂粒を含む。焼成良好で、青灰色を呈する。	同 上
30	須恵器蓋环蓋部、口径12.3。	肩は鋭い一条の突部で、口唇は無段のもの。	外面天井部に回転ヘラ削り、内面天井部に横なでが入り、他の部分には回転なでを施す。	細かく密で、若干の砂粒を含む。焼成良好で灰白色を呈する。	同 上
31	須恵器蓋环蓋部、口径12.5。	肩は鋭い突部状のもので、口唇は内面が軽く肥厚する。	残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒をほとんど含まない。焼成良好で青灰白色を呈する。	同 上
32	須恵器蓋环蓋部、口径13.4。	肩の段を失い、口唇は丸い。	内面天井付近横なでの他、残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	同 上
33	須恵器蓋环蓋部、口径9.9。	内側するかえりをもつ。	内面は天井付近横なでの他は回転なで。外面調整不明。	細かく密で、砂粒を少々含む。焼成良好で暗青灰色を呈する。	同 上
34	須恵器蓋环蓋部、口径9.2。	内側するかえりをもつ。	残存部には全て回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒をあまり含まない。焼成良好で青灰白色を呈する。	同 上
35	須恵器蓋环蓋部、口径8.1。	かえりをもち、つまみを有する。	内面天井付近横なで、外面天井付近回転ヘラ削りを施し、他の部分には回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	同 上
36	須恵器蓋环蓋部、	つまみを有する。	残存部内面は横なで、外面には回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	同 上
37	須恵器蓋环蓋部、口径10.9。	かえりをもつ。	外面天井付近回転ヘラ削りの後回転なでを施し、他の残存部には回転なでが見られる。	細かく密で、砂粒を少々含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	左右対称復元。

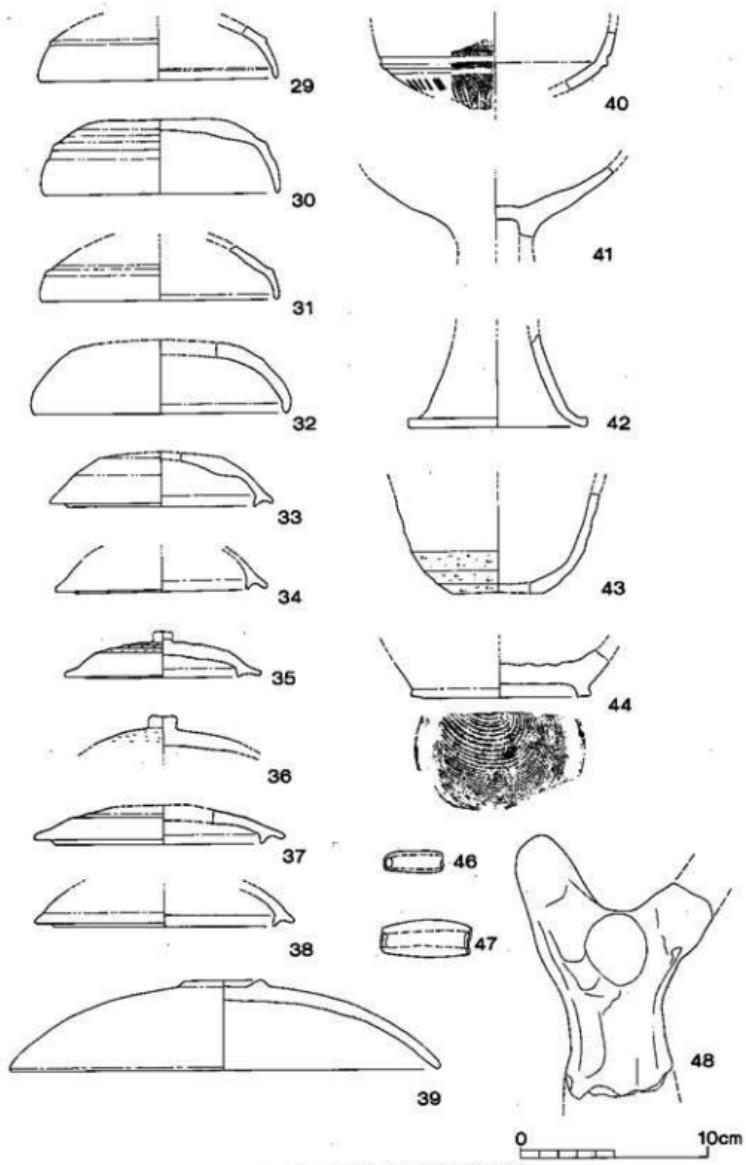
No.	器種・法量(cm)	成形	調 燃	胎 土・焼 成	備 考
38	須恵器蓋環蓋部。口径11.7。	軽く内傾するかえりをもつ。	残存部には全て回転などが見られる。	細かく密で、少量の砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	左右対称復元。
39	須恵器蓋。口径22.7。	円盤状の器形と、低い輪状つまみを有する。	全面なで調整と思われる。	やや荒めで、砂粒を多く含む。焼成良好で灰橙色を呈する。	左右対称復元。土師器と呼ぶべきものかもしれない。
40	須恵器高柄。	肩部の角度変化点に1条の突帯と2条の沈線をもつ。	残存部外面は回転などで、施紋はクシ状工具によるもの。	細かく密で、砂粒をあまり含まない。焼成良好で青黒灰色を呈する。	左右対称復元。復元に不安有り。
41	須恵器高柄。	純い作りもの。	肩部内面横なもの他、残存部には全て回転などを施す。	細かくゆるめで、砂粒をあまり含まない。焼成良好で青灰白色を呈する。	
42	須恵器高柄。脚部径9.2。	脚端部は外反し、軽く肥厚する。	残存部には全て回転などを施す。	細かく密で、砂粒をあまり含まない。焼成良好で青灰白色を呈する。	
43	須恵器底部。	比較的細長いもの。	外面底部は回転へラ削りで、他は回転などで、内面残存部にも回転などを施す。	細かく密で、砂粒を多く含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	左右対称復元。
44	須恵器底。底径9.6。	軽く外反する高台をもつ。	外面底部は手切り底で、他の残存部には全て回転などが見られる。	細かく密で、砂粒を少く含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	
45	須恵器大甕。口径32.6。	口縁は外方へ折れ曲る、短いもの。	外面口縁部は回転などで、体部には方格状の叩き目をもつ。内面には回転などで施し、肩部以下にカギ目状の荒い調整が見られる。	細かく密で、砂粒を含む。焼成良好で青灰白色を呈する。	左右対称復元。
46	土師質の土玉。最大径1.2。現存長3.2。	純い作りのもの。		細かく、ゆるめで、砂粒をほとんど含まない。焼成良好で灰白橙色を呈する。	全面風化のため、調整等不明。
47	土師質の土玉。最大径2.0。現存長4.8。	同 上		細かく密で、砂粒をほとんど含まない。焼成良好で暗灰褐色を呈する。	同 上
48	土師質の土製支脚。		手づくね整形の後、部分的にヘラ削りを施す。	荒く密で、砂粒を含む。焼成良好で灰橙色を基調とする。	支脚を1本欠損。
49	須恵質の土馬。	ていねいな作りのもの。	手づくね整形の後、部分的にヘラ削りを施し、なでしあげをしている。	細かく密で、砂粒をほとんど含まない。焼成良好で青灰白色を呈する。	桿馬で、四肢と頭部、尻尾を欠いている。



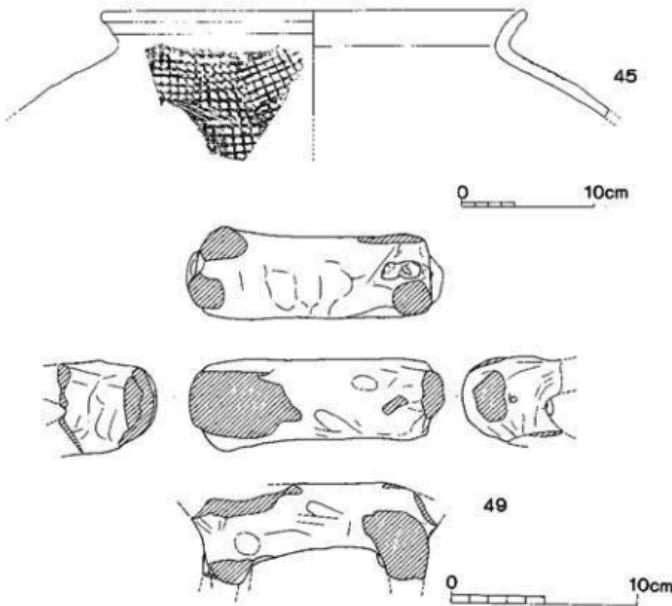
第2図 御崎谷遺跡出土遺物実測図(1)



第3図 鶴崎谷遺跡出土遺物実測図(2)



第4図 御崎谷遺跡出土遺物実測図(3)



第5図 御崎谷遺跡出土遺物実測図(4)

### ま　と　め

本遺跡は、明確な遺構や時期の明確な遺構を検出できなかったが、多数の遺物を検出すことができた。この原因等は、既に述べており繰返さない。

遺物の方から若干のまとめをしておく。検出した遺物は、土師器・須恵器・木器等である。土師器と須恵器の比率は、約3対7となりそのうち図示できたのは49個体分である。土師器で時期の明確なものとしては、須恵器出現前後と推定されるもの（2・3・8・10）がある。須恵器では、大半が山本編年のⅢ～Ⅳ期のものであり、14はⅡ期と考えられる。遺物として特異なものは、5・6・12・13・45～49があげられよう。

遺物の性格としては、土馬が出土していることなどから一部に祭祀的な性格を有する所があったと考えられよう。

## 小屋谷古墳群

小屋谷古墳群は当初の分布調査により、両乞山から北へ伸びる丘陵中央が鞍部となる標高60m余の所に、1基づつ存在するという予見のもとに発掘調査に入った。しかし発掘調査が進行するに従って、3基の古墳が存在することがわかった（第1図）。

北から1号墳・3号墳・2号墳となる。1号墳の北側には広い平担面があり、1号墳と3号墳との間は鞍部、2号墳の南は次第に低くなり、最後の丘陵根元部は凹字状に切られた道となっていた。各古墳は丘陵の東西（幅）を全部範囲とし、自然丘陵斜面との間に変化は認められなかった（ポケット図）。

本古墳群所在の丘陵中腹には、同丘陵と西にある東岩坂要害山城跡所在丘陵間の溜池より、東にある御崎谷遺跡所在の水田用として、丘陵を一周する水路と丘陵鞍部下に用水トンネルがあった。<sup>註2</sup>

註1 東岩坂要害山城跡に付随するものという。

註2 石倉吉郎氏によればトンネルは大正中頃宝満山鉱夫により開通したという。

### 調査結果

小屋谷古墳群は、古墳3基と箱式石棺1基で構成されていた。1号墳は内部主体1基・壹棺1基と裾に箱式石棺1基、2号墳は内部主体2基と両端に溝、3号墳は内部主体2基と両端に溝が検出され、各古墳に祭祀の跡が1所伴っていた。

以下、古墳毎に造構（墳丘の調査・内部主体・遺物の出土状況）と遺物とに分けて述べていく。

#### 造構

##### 1. 1号墳

###### (1) 墳丘の調査（第1図）

本古墳群中最も北に位置し、丘陵先端部は長さ約18.00m、中央幅約9.00mの平担面があり、その南に丘陵中央部の鞍部との間に墳丘があった。平担面標高約60.00m、墳頂標高62.75m、墳丘南平担面標高61.75mであった。

地形測量の段階では、丘陵軸に長い方墳の北側に造出しのついたやや不整形な古墳で、北側平担面には祭祀の跡があると予想した。

発掘方法は、墳丘部を四分法、北側平担面も四分法で行う全面調査とした。調査の結果、壇棺・箱式石棺・墳頂部の祭祀跡・古墳主体部の順に検出した。

墳丘は、墳丘南を浅い尾根に直交する溝で限っており、北側では造出しの北には区画するものではなく、東西は尾根幅全体を利用し段差等はなかった。規模は、長軸（墳丘南溝南端から）19.30m・短軸（墳丘中央）約15.00m・高さは北側で約2.15m・南側で約0.80m・南側溝の幅約2.15m・深さ0.20m・長さ約4.00mを測る。墳丘平担面は、長さ約8.30m・幅約5.00mを測り、中央やや南にほぼ東西方向の主体部1基、同じく主体部北側に接してほぼ南北方向の祭祀跡1基、同じく北西隅に壇棺1基を配していた。造出し部は、長さ約3.00m・幅約2.80m・高さ約1.25mを測り、北西隅部に造出し部を一部破壊して箱式石棺が占めていた。北側平担面は、長さ約18.00m・幅約9.00mを測ったが、遺物・遺構は検出されなかった。

墳形について若干の考察をすると、南平担面レベルと造出し部平担面レベルはほぼ同じであるが、墳丘平担面とも考えあわせると3者は同一線上に並ばず、それぞれずれがある。また、造出し部については、西側墳裾が箱式石棺により墳丘北西隅の削平を受けている。

### （2）内部主体（第2図）

墳丘平担面中央やや南に位置し、主軸をN-73°-Eにとり、墳丘の主軸にはほぼ直交していた。地山面から掘り込まれ、地山面から表土（封土）上面までは約0.40mあり、やや不整形な長方形の平面プランである。

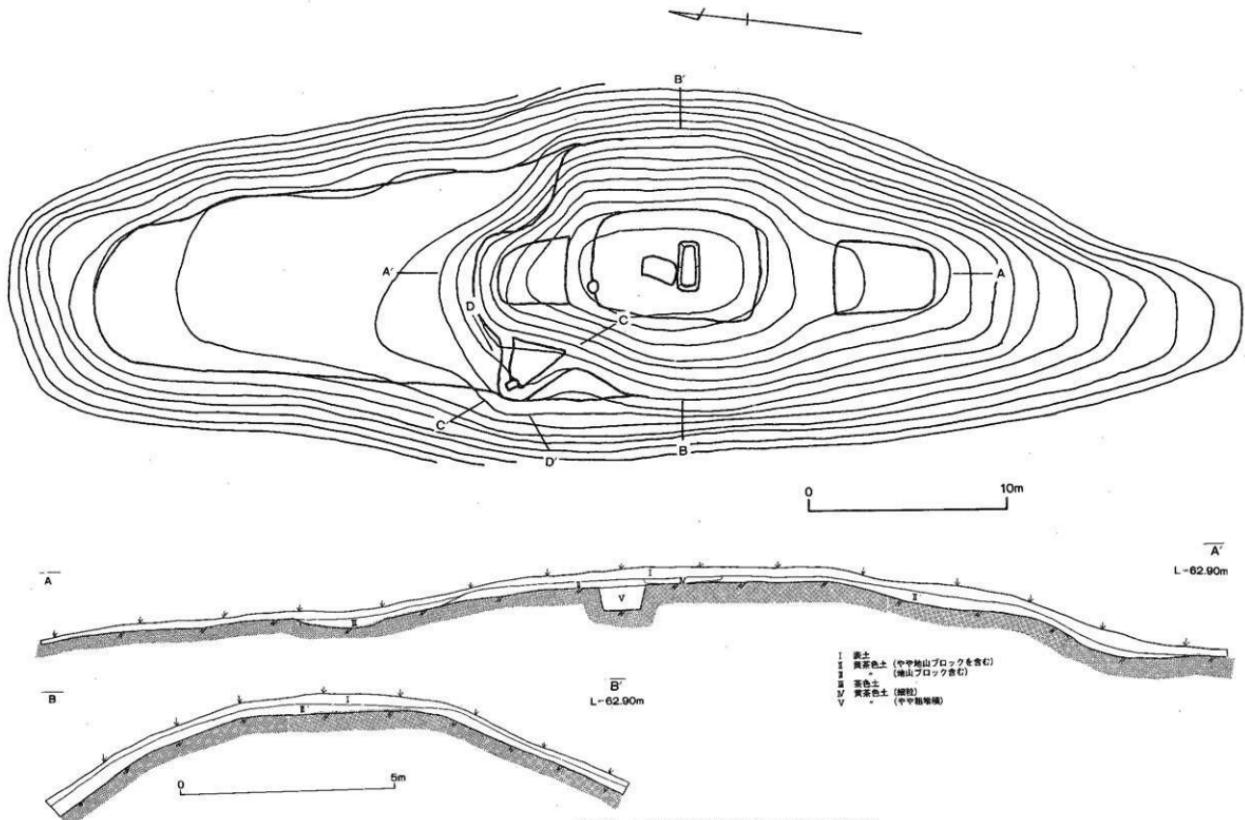
検出規模は、長さ約2.45m×幅約1.10m×深さ約0.60mであるが、床面に残っていた長軸両側の溝より推定し、木棺規模は長さ約1.70m×幅約0.60m×深さ約0.40mの組合木棺と考えられる。

床面に残っていた溝は、東側に残っており若干東側に傾斜する床面をなしていたとも考えられるが、西側は木の攪乱があり微細については不明である。遺物は検出されなかった。

主体部検出中、墳丘平担面ほぼ中央に、墳丘の主軸に沿って周囲と異なった土色部分が検出された。当初、主体部を予想したが、プラン、深さ等から祭祀に関連するものと考え、後の精査により後述・図示した土器が付近から出土したことから断定した。やや明確な部分の検出規模は、丸みをもった台形状プランで長軸をN-10°-Eにとっていた。図示したものは、検出時のかなり明確な所までであり、祭祀時には封土を浅く掘りくぼめ、検出時のものに北ないし東へ若干広がったものと考えられる。遺物は検出されなかった。

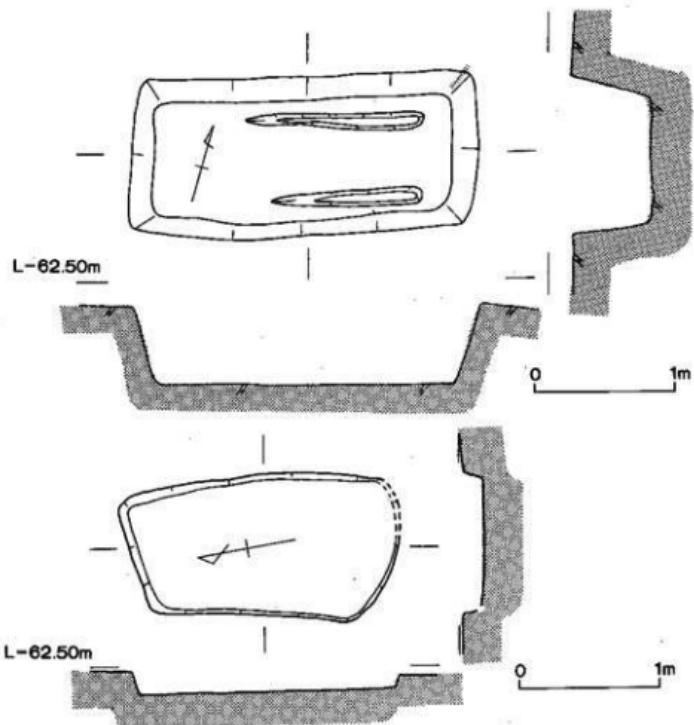
### （3）遺物の出土状況

遺物は、鼓形器台1・低脚壺4・土師器高壺1・須恵器片1を検出しているが、図示できたのは鼓形器台1と低脚壺1である。



第1図 1号墳開発実測図並びに1号墳土層実測図

須恵器片が墳丘平担面中央部の表土下、高环は南平担面中央部の表土下から検出され、鼓形岩台、低脚环は墳丘東斜面ないし墳丘平担面中東側の封土内から検出された。

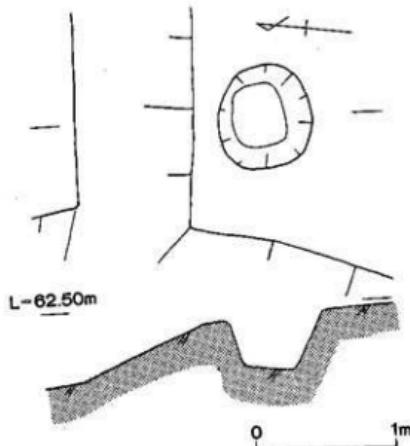


第2図 1号墳主体部（上）同祭祀跡実測図

## 2. 壱 棺

### （1）検出状況（第3図）

1号墳丘平担面北西隅から検出され、頭部以下は完形であった（細かい割れはあった）。表土直下から口縁部及び受け口のたが部分が検出されたことに端を発するもので、調整、残存状況もきわめて良好のものであった。掘り方規模は、地山面で深さ約41cm・径約73cmのやや角のある円形をし、底部は約45cm×38cmの隅丸長方形でやや凹地になっていた。地山面と底面の軸線から若干南西に傾斜していたとも考えられるが、ほぼ直立の状態であったとして誤りなかろう。



第3図 壱棺掘り方実測図

### 3. 箱式石棺

#### (1) 検出状況 (第4図)

1号墳北西隅に不整形な張出し状のものがあり、腐葉土を除去した時蓋石を検出したことに端を発する。

蓋石は当初一枚であったものが、何等かの力を受け三つに割れていた。主な側石は、長辺に各1、短辺に各1の計4枚であり、その周囲に補強と思われる石があった。底石は大きいもの1・小さいもの1であり、側石に狭まれていた。蓋石はかなり風化していたが、他はかなり良好な状態であった。

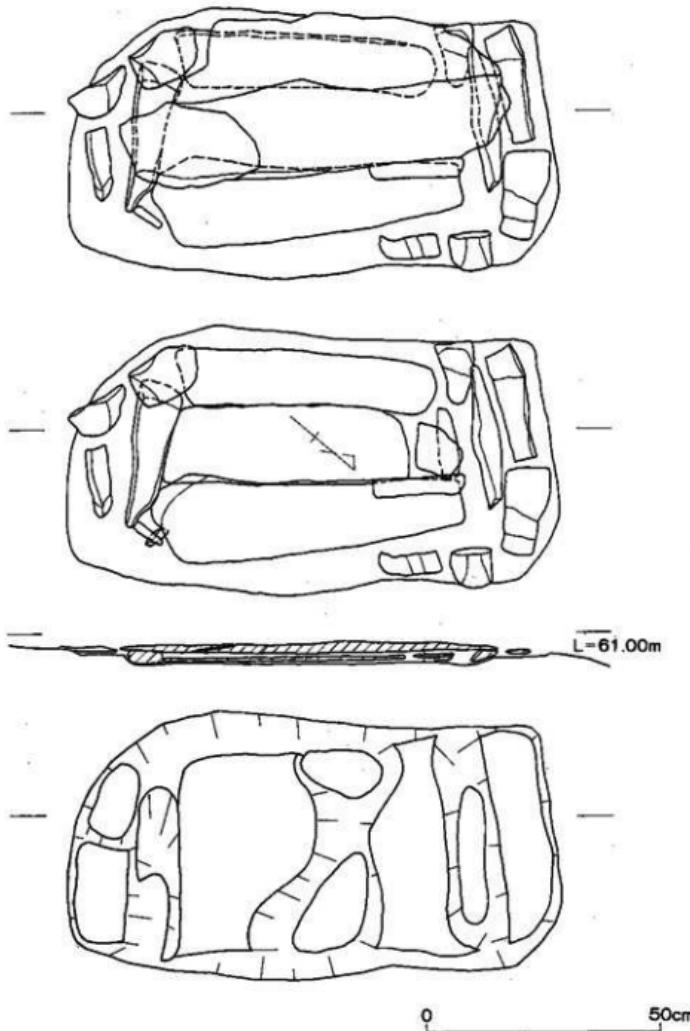
掘り方は石棺が入る程度であり、やや長辺部分で偏りがみられた。掘り方の検出規模は、長さ約1.30m×幅約0.55m×深さ約0.36mであった。石棺内規模は、長さ約0.65m×幅約0.17m×深さ約0.13mであった。長軸は、N-43°-Wを指していた。

た。

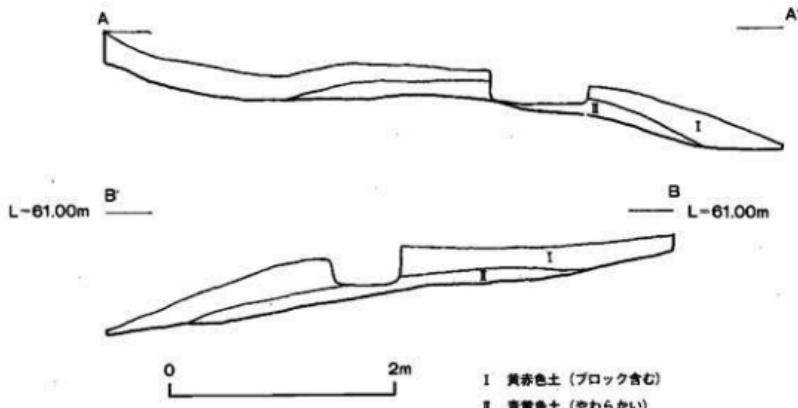
土層観察による構築方法は、1号墳との関連が表土から浅いため不明確であり推測がかなりの部分を占めるが、1号墳が築かれて後封土の一部が流出した頃に構築した。旧表土をほとんど残したまま1号墳側を地山面まで下げたレベルで底をつくり、その後石組みをし、1号墳の北西隅の左右不对称部分の封土の一部をもって封土とするようにしたものと考えられる(第5図)。

石棺内及び封土内に遺物がなかったため、時期は不明であるが、1号墳とあまり差がな

いと考えられる。



第4図 箱式石棺実測図



第5図 箱式石棺土層実測図

#### 4. 2号墳

##### (1) 墳丘の調査（第6図）

本古墳群中最も南に位置し、丘陵根元部から次第に標高62.70mの本丘陵の最高所部になる所であり、丘陵幅も急に広がった所である。墳丘南裾部は標高約62.00m、同北裾部は標高約62.25mであった。

地形測量の段階では、やや幅広の方墳で一部崩壊したものと推定した。

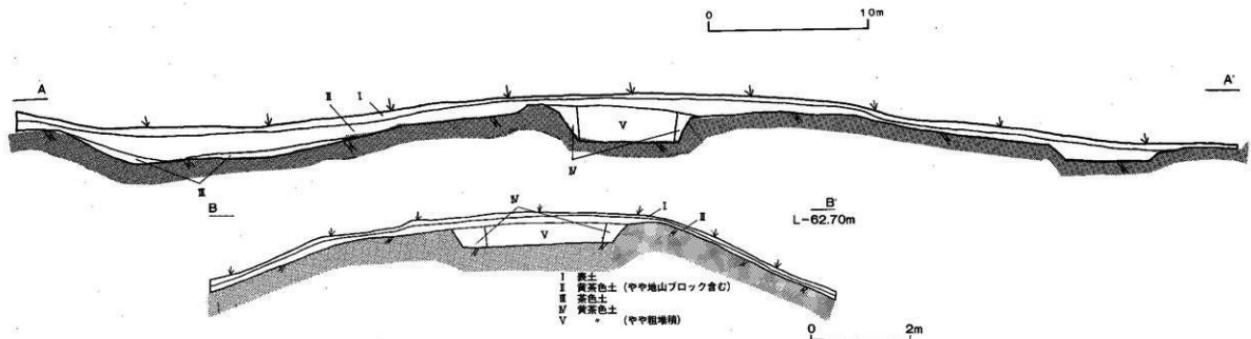
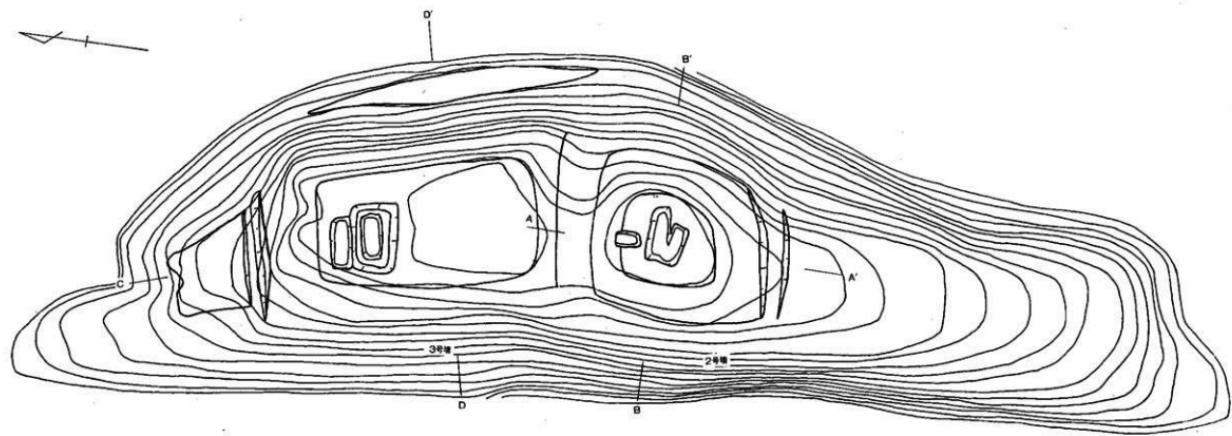
発掘方法は、1号墳同様に四分法で行う全面調査とした。調査の結果、北側周溝・祭祀跡・主体部・南側周溝の順に検出した。

墳丘は、丘陵軸南北を溝で限り、尾根幅全体を利用し段差等はなかった。規模は、南北約10.90m・東西約10.50m・高さは北側で0.80m・南側で1.00m・北側周溝幅約1.30m・深さは平坦面・長さは約9.50m・南側周溝幅約1.50m・深さ約0.25m・長さ約0.70mを測る。墳丘平坦面は、南北約5.60m・東西約6.70mを測り、ほぼ中央に主体部が2基切合って、ほぼ東西方向に位置し、北辺平坦面肩に南北方向の祭祀跡1基があった。

墳形は南東隅が立地条件から不整形であるが方形であり、南側周溝は地山（堅）を鋭く切っているのに対し、北側は地山（堅い）まで切っておらずゆるやかである。

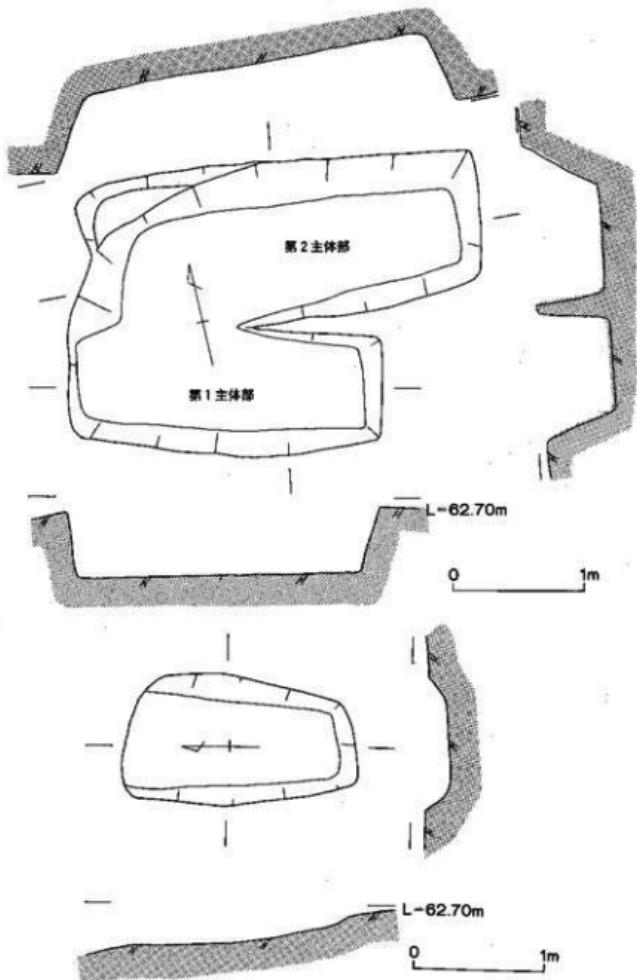
##### (2) 内部主体（第7図）

墳丘平坦面ほぼ中央に位置し、2基の主体部が切り合った関係で丘陵軸にほぼ直交していた。第1号墳同様に地山面から掘り込まれ、地山面から表土（封土）上面までは約0.40mあり、やや不整形な長方形の平面プランである。



第6図 2・3号墳実測図並びに2号墳土層実測図

第1主体部の検出規模は、主軸をN-78°-Eにとり、長さ約2.55m×幅約1.00m×深さ約0.56mを測る。木棺規模は床面規模及び土層観察により推定し、長さ約1.90m×幅約0.50m×深さ約0.40mであろう。床面はやや西側に傾斜していたと推定される。



第7図 2号墳主体部（上）同祭祀跡実測図

第2主体部の検出規模は、主軸をN-88°-Eにとり、長さ約3.10m×幅約1.25m×深さ約0.58mを計る。木棺規模は床面規模及び土層観察により推定し、長さ約2.30m×幅は西側で約0.80m・東側で約0.60m×深さ約0.40mであろう。床面はほぼ平担面であるが、木棺プランは西側に広いものと考えられる。

両者の前後関係であるが、試掘溝及びその壁を観察の主体としたため不明確であるが、第1主体部が先に造られたと推定できた。ともに遺物は検出されなかった。

表土除去中、墳丘平担面北辺肩より斜面にかけて土色の異なった部分が検出された。1号墳の側並びに本古墳北側墳裾部の土器出土状況より1号墳同様に祭祀に関するものと推定した。検出プランは、主軸を磁北にとり北に傾斜（墳丘斜面に沿う）していた。出土遺物は検出されなかった。

### (3) 遺物の出土状況

遺物は、鼓形器台3・低脚環1・土師器高环1・須恵器壹1・同环身7を検出しているが、図示できたのは鼓形器台3・須恵器壹1・同环身4である。

鼓形器台等は、北側周溝裾中央部から東にかけての表土下、須恵器は北側周溝西端部ないし3号墳南西墳縁との中央部にかけての表土下から検出された。

## 5. 3号墳

### (1) 墳丘の調査（第8図）

本古墳所在丘陵は鞍部により南北2つに分かれるが、本古墳は南丘陵北側に位置し南側には2号墳が位置している。

当初の分布調査（伐採前・後）では古墳と確認されず、荒神祭祀跡ということで調査に入ったが、結果として本古墳群中最も規模の大きい古墳であることが判明した。

墳高標高約62.75m・南裾部標高約61.00m・東裾部標高約59.75mであった。

地形測量の段階では、古墳と考えるならば丘陵軸にかなり長いもので主体部も2基以上あろうと推定し、四分法にて調査に入り北側周溝及び外側平担面・東側墳裾外側平担面・主体部上の祭祀跡・主体部の順に検出した。

墳丘は、南側を浅い溝で限り北側は地形を上手に利用して斜面を削出しその下に溝を設けさらにその外側に平担面を削出している。また西側は丘陵全体をそのまま利用しているのに対し、東側は斜面を削出しその下に中ふくらみの両端は尖った平担面を削出していた。規模は、南北（溝内側間）約19.00m・東西約15.00m・高さは北側で約1.5m・南側で約0.8m・溝は北側で幅約1.3m・深さ約0.3m・長さ約7.5m・南側で幅0.7m・深さ約0.1m・長さ約10.0mを測る。本古墳には東と北に墳裾外側に平担面があるが、北は南北約4.5m・

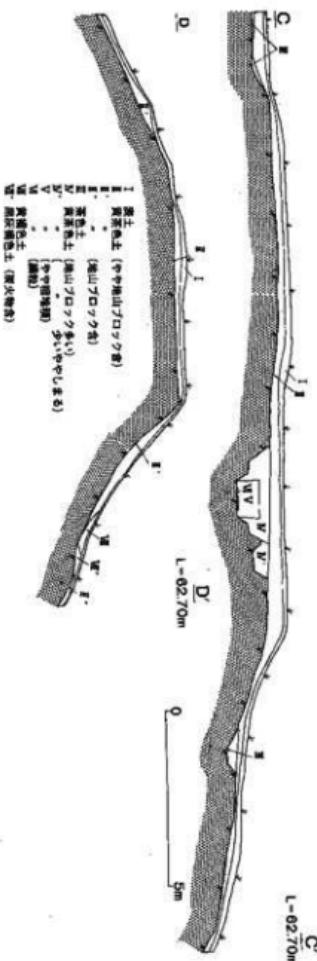
東西（中央）約5.0mの南が広い台形状を呈し、東は南北約18.0m・東西（中央—最大幅）約1.7mのレンズ状を呈している。墳丘平坦面は、長さ約13.7m・幅約8.3mを測り、北側方に主軸をほぼ東西にとった主体部2基と第一主体部の真上に祭祀跡1基を配していた。なお残り2基は主体部があった所より約0.2m高く荒神跡であるが、その下からは主体部等は一切検出されなかった。

墳形について若干の考察をすると、方墳ではあるが長方形墳というふくわしいくらいの形をしている。また視覚的に見る時、西と南からは地形的に視覚的なことは除外すると北と東からの視覚的效果を狙うことは地形的にみて必要である。このことは本古墳の築造に大きく関与しているようで、1号墳（北）からみる時、前に平坦面がありそこから約1.5m以上の高さを有し東西も急斜面で形づくり、東からみる時、前に平坦面がありそこから約16.5m以上の高さを有していた。以上を総合し地理的条件から北東方向からみる時、かなり大きいものとして映り被葬者の権威を誇示するには充分と考えられる。

## （2）内部主体（第9図）

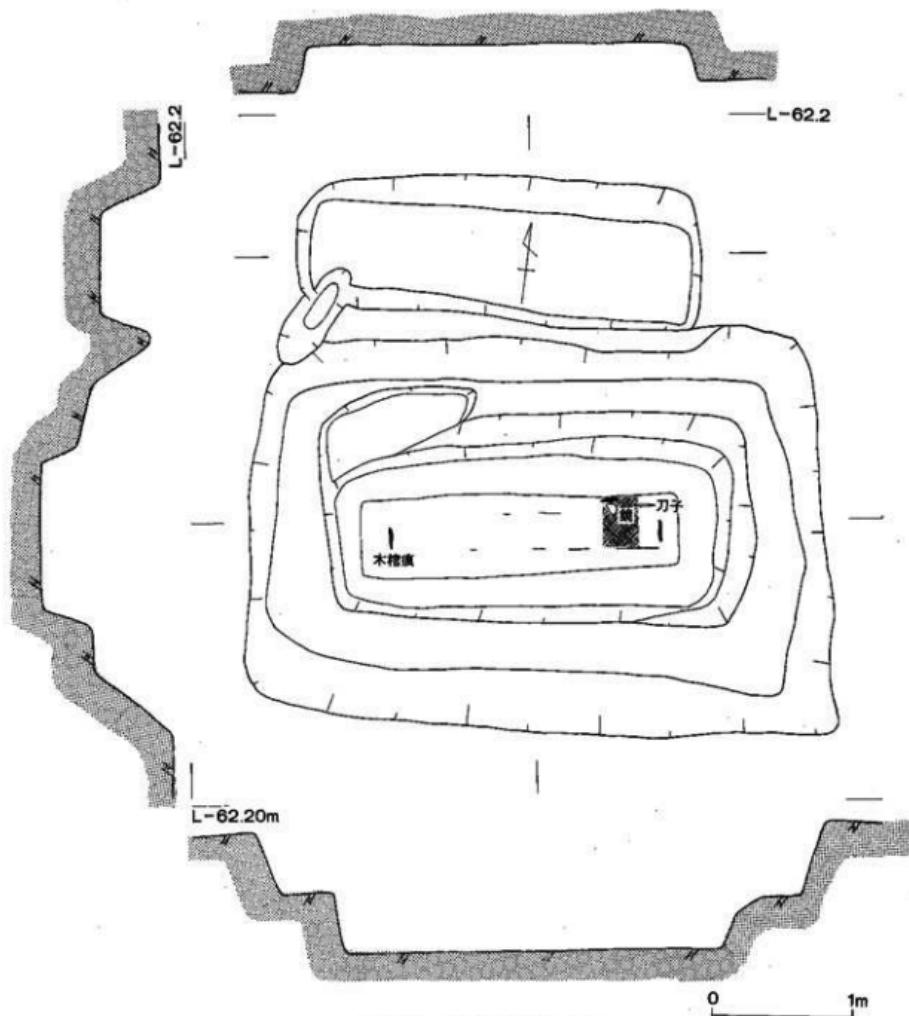
墳丘平坦面北側に位置し、2基の主体部がほぼ並列に丘陵軸にほぼ直交してきた。1・2号墳同様に地山面から掘り込まれ、地山面から表土（封土）上面までは約0.4~0.5mあり、ほぼ整った長方形の平面プランである。

第1主体部は、主軸（木棺痕）をN-79°-Eにとる二段掘りである。検出規模は、地山掘削面で長さ約40.7m・幅約28.3m・深さ（二段目まで）約0.5mのやや南辺の長い長方形プランを呈し、二段目は長さ約3.05m・幅約15.0m・深さ約0.35



第8図 3号墳土層実測図

m のやや東辺が長くまたやや西辺側が深い長方形プランである。地山面は、北西隅が極端に低いほかはほぼ水平である。二段目とのテラスは、全体に西側に微少な傾斜をしており北西隅に浅い階段状の凹地がある。木棺規模は、床面木材痕や土層観察から長さ(内法面)



第9図 3号墳主体部実測図

約1.88m×幅（同）約0.55m×深さ約0.5mを測る。木材痕の観察から短辺の厚さ約3cm・長辺側の幅2cmの組合せ木棺としてほぼ誤りなかろう。ただ木棺幅については、頭部側の幅であり体部以下についての土層（床面）観察では、南長辺は頭部での木材痕延長線上にあるが北長辺は頭部での木材痕より約20cm弱狭くなっている。これに対し短辺は、ほぼ平行対応して長さ25~20cmを計る。

第一主体部からは、ベンガラ、刀子、舶載鏡・木材片が出土している。ベンガラは、頭部と推定され所の木棺内、長さ約25cm・幅約33cmに厚く検出され、厚い箇所では約1cm前後もありその発色も鮮かであった。この影響と推測されるが、床（掘り方）は全体に淡く黒味がかった。舶載鏡は、北側板側に鏡面を床側にして割れた状態で出土した。刀子は、同じく北側板に平行して舶載鏡の東側から出土した。

遺物等の検出面ないし掘り方までの土層は、あたかも地山土をふるいにかけたような精選された細粒の土であった。

掘り方床面は、特に木棺下で顕著であるが加工痕が明瞭に確認できた。幅の広い痕跡ではなく斜め上方から工具をあてた1.0~1.5cmの痕跡である。

第二主体部の検出規模は、主軸をN-86°-Eにとり、長さ約2.90m×幅約1.05m深さ約0.45mを測り、第一主体部とは約10~27cmの間隔がある。地山面は、南西隅が最も低く西へ微少な傾斜をしている。床面は、中央が最も低く全体に西側に傾斜している。加工痕等は認められなかった。南西隅と第一主体部北西隅との間に長楕円形のピット状遺構が検出された。検出規模は、主軸をN-26°-Eにとり、長さ約0.8m×幅約0.27m×深さ約0.75mを測る中くぼみである。

主体部等の新旧は、土層観察より第一主体部の方が第二主体部よりも古い。また長楕円形の遺構は、土層観察より第二主体部とほぼ同時期ないし若干新しいと推定できるが確実なものではない。

第一主体部は埋葬遺構と考えてほぼ誤りないと考えるが、第二主体部については不明である。

表土除去中、第一主体部遺物検出箇所真上から土器微細片が多量検出される箇所が検出された。その範囲は、東西約1.2m×南北約0.7m×深さ約0.12mのやや不整形な長方形プランである。祭祀跡として誤りなかろう。微細片した土師器の高環・壺・壺等と考えられるものが出土している。

### (3) 遺物の出土状況

遺物は、鼓形器台2・土師器壺2以上・同高環1以上・同壺2以上・鏡1面・刀子1本・ベンガラ多量・木材片1点を検出したが、図示できたのは壺2・高環1・鏡・刀子であ

る。

大きい土師器壺は、北側周溝テラス面で検出され小さい壺は祭祀跡から検出されたもの的一点である。高壙・鼓形器台は、祭祀跡から検出されたものである。

鏡・刀子は、第一主体部組合せ木棺内から検出した（内部主体の項参照）。

## 遺 物

### (a) 鏡（第10図）

3号墳第一主体部の組合せ木棺の床面から刀子とともに出土した。検出時は数片に割れていたが、接合の結果約9%を欠くものであった。これは出土状況等から副葬時に既に欠損していただろうと考える。

面径9.4cmを測る幅広の平縁、内区主文帯は内外に施されている同方向斜行櫛齒文によつて狭まれている。文様は、内区主文帯を4乳で区画し乳間にそれぞれ逆S字状文を置き、その外側に2・内側に1の鳥文を配している。また凸線文帯と円座鉢との間には本来弧をなしている1本の細縄を内区斜行櫛齒文と同方向に置いたものと、四方に配した3本1組の網線とが描かれている。

表面観察の結果、特に鏡面側から布に包まれた痕跡が認められ、遺存状況があまり良好ではないが白銅質と考えられる。

仿製鏡の中にはこのような文様は認められない。従って舶載鏡と考えられ、特に玉葬代の前後に盛行した「四蛇鏡」に該当するであろう。  
（宮本）

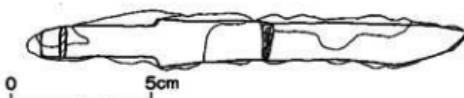
注1 九州歴史資料館高倉洋彰氏にご教示による。



第10図 3号墳出土鏡拓影

(b) 刀子 (第11図)

3号墳第一主体部の組合せ木棺の床面から鏡とともに出土した。柄部を除きほとんど完形であり、布で包まれた状態を片面に明瞭に残している。刀身15.2cm・刀幅1.4cm・棟幅0.4cmの刃部はゆるやかな内弧をえがいている。目釘孔は、確認できなかった。(宮本)

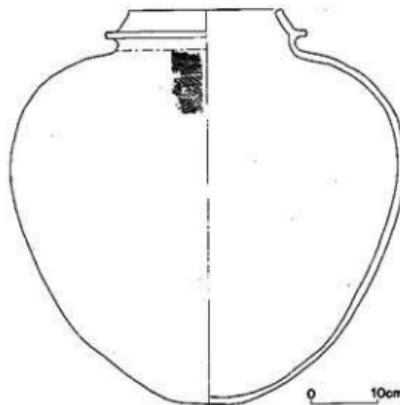


第11図 3号墳出土刀子実測図

(c) 壺棺 (第12図)

1号墳墳頂平坦面北西端からほぼ正立状態で出土した。器形は、無頭壺で口径約21.5cm(略復元一以下同)・高さ58.0cm・胴部最大径59.5cmを測る。外面は、肩部に上から左斜め・右斜め・左斜めの櫛状工具による刺突斜行文で施し、谷境を一条の平行沈線がめぐらしている。最大部は横方向、それ以下は右斜めないし縦方向の刷毛調整である。内面は、頸部以下を横方向の幅広のヘラ削りである。底部は外面径約6.5cmの平底状を呈している。底から全体の3/4高いところに不整形の穿孔のあとがみられる。埴輪質の焼成良好、胎土は粗い石英粒を含む赤褐色を呈している。東森市良氏の所謂「壺棺」である。<sup>註1</sup> (宮本)

註1 村文化財保護審議会東森市良委員のご教示による。



第12図 1号墳出土壺棺略実測図

#### (d) 土器

小屋谷古墳群から出土した土器は、土師器と壺棺、須恵器類に大別される。そのうち須恵器類は時期的に古墳時代以降のものであり、出土量や、出土状況から見ても本古墳群築造時のものとは言えない。また壺棺については山陰での出土例をあまり見ない類のものであり、現時点では、古墳群の時期決定の資料としては使いにくいものと思われる。ところで土師器については何れもほぼ同一の型式内容を示すものであり、出土状況を考え合わせば本古墳群に確実に伴なうものであることが解る。よってここでは出土土師器の検討によって小屋谷古墳群の時期を示すこととする。

土師器は何れもかなり細片化して出土したものであるが、総数18個体分の出土が確認できた。内訳は、1号墳…鼓形器台1、低脚坏4、高坏1。2号墳…鼓形器台3、高坏1、低脚坏1。3号墳…鼓形器台2、高坏1以上、坏2以上、壺形土器2以上である。そのうち図示したのは9点であり、これらがある程度全容のうかがえるもの全てであった。それらの土師器は相互に明確な時期差が確認できないため、ここでは古墳1基毎の検討は行わず、全出土土師器をまとめて器種別に検討してゆく。

低脚坏は1・2号墳から出土しており、図示したのは1点のみである。この脚部は丸みをもったもので、内面はゆるやかにカーブしながら入り込んでいる。坏部は丸みをもったもので、内面はゆるやかにカーブしながら、比較的大きく広がりそうなものである。類例としては安来市小谷墳墓例<sup>11)</sup>、東出雲町大木権現山1号例<sup>12)</sup>等が挙げられる。ただし安来市鍵尾土塙墓群<sup>13)</sup>、松江市の場墳墓から出土している低脚坏は何れも坏部の広がりの小さなものであり、本古墳群のものとは型式差をもっている。

鼓形器台は計5点を図示した。何れも筒部の短いものであり、上下台共に大きな広がりを見せており。筒部と台との間の段は、ほぼ真横に突出するものと、鈍く軽い突出をするものとがある。やはり小谷墳墓例、大木権現山1号例に近似しているが、鍵尾土塙墓群例と比較した時、全体的な器形、筒部の様相等に明らかに後出的要素を見い出せるものと言える。

3号墳から出土した脚部は、平たく大きく広がる、比較的低めのものである。この種のものは県内の出土をあまり見ないが、三刀屋町松本1号墳<sup>14)</sup>、鳥取県米子市日原6号墳例<sup>15)</sup>が全体的に近似性をもっている。

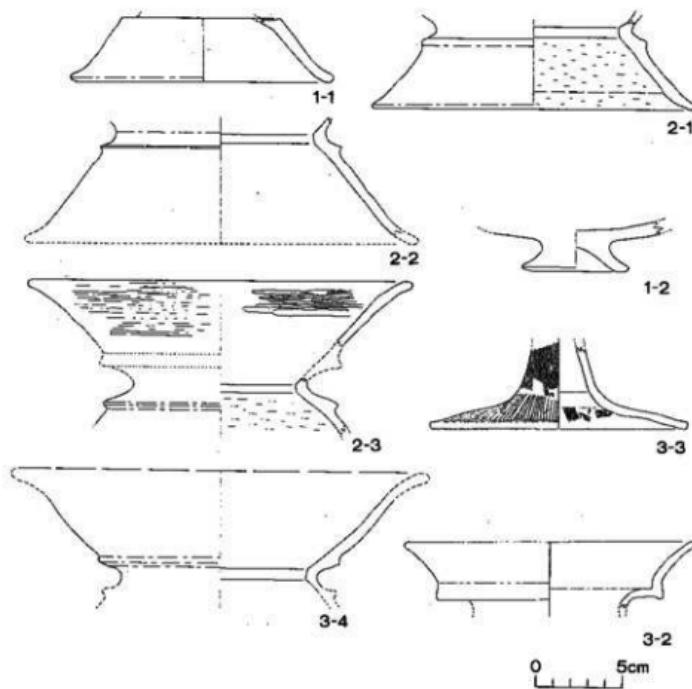
同じく3号墳から出土した壺形土器であるが、これは口縁部の大きく広がる二重口縁のものである。最近松江市中竹矢遺跡<sup>16)</sup>から比較的プロポーションの似た土器が検出されているが、県内の類例を見ないものである。岡山県笠岡市高島遺跡出土例<sup>17)</sup>、同倉敷市上島遺跡出土例<sup>18)</sup>に類似のものがある。

以上の観察結果をまとめると、小谷墳墓の土器は藤田憲司氏の編年によるV期（前島己

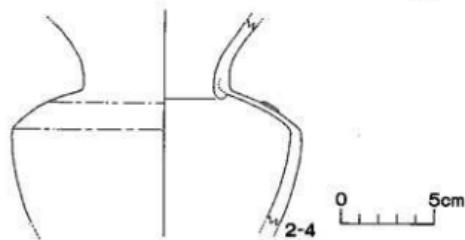
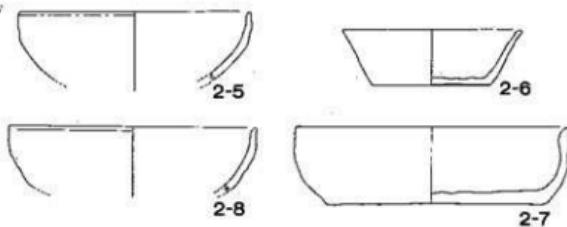
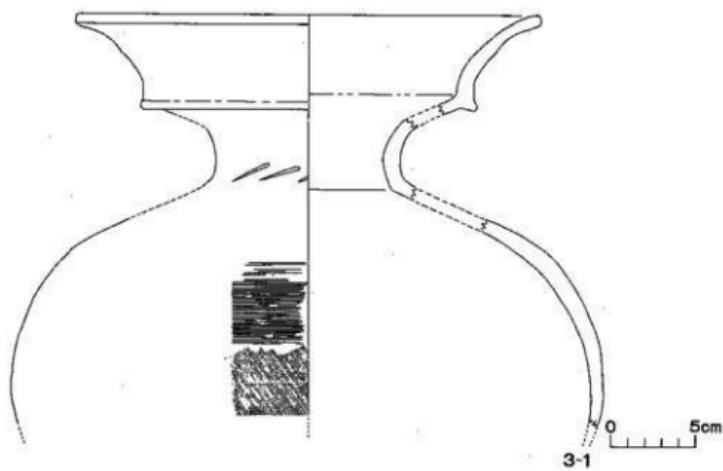
小屋谷出土土器観察表

No.	器種・法量(cm)	成形	調整	胎土・焼成	備考
1-1	鼓形器台。 低径4.8。	縁部は丸く、軽く外方へそっている。	内面横方向のヘラ削りを施す。外面不明。	やや荒めで、砂粒・石英片をかなり含む。焼成や不良。	口徑相きは推定。小型のものと思われる。左右対称復元。
1-2	低周环。 低径4.8。	脚部内面は自然に、比較的浅く内溝している。環部はかなり大きく広がりそうである。	残存部は全てなでを施す。	細かく、若干荒め。砂粒・石英片を少量含む。焼成良。	左右対称復元。
2-1	鼓形器台。 低径17.8。	筒部のくびれは小さく、脚端部・段部共に丸く続い。	内面方向のヘラ削りで、筒部以上は横方向のなでと思われる。外面不明。	若干荒めで、砂粒・石英片を含む。焼成良。	左右対称復元。外面はかなり風化が進んでいる。
2-2	鼓形器台。 最小径11.8。	筒部のくびれは小さく、段部はやや鉗め。	内面下半は横方向のヘラ削りで、上半は不明。外面横方向のなでを施す。	細かく、若干荒め。砂粒・石英片を少量含む。焼成良好。	左右対称復元。
2-3	鼓形器台。 口径20.8。	同 上	内面半に横方向のヘラで、下半に横方向のヘラ削りを施す。外面には横方向のなでを施す。	細かく密。砂粒をほとんど含まない。焼成良好。	左右対称復元。脚台上方に円形の溝文を有する。焼成前のもので、歯は不明。
2-4	須恵器蓋。	口縁はほぼ直にたちあがった後大きく外反。体部の肩はかなり鋸く屈曲する。	内面は回転なで。外面口縁部に回転なで、肩部にヘラ削り、体部にヘラなでを施す。	細かく密で、少量の砂粒を含む。焼成良好で、青灰色を呈する。	肩に円形の浮文を付す。
2-5	須恵器环身。	口縁端部は軽く外反している。	内・外面共に回転なでを施す。	ややゆるめで、砂粒をあまり含まない。焼成やや甘めで淡灰褐色。	左右対称復元。口徑に不安有り。
2-6	須恵器环身。 口径9.3。	口縁端部を軽く外方へとひき伸ばしている。	内・外面共に回転なで。底面は糸切り底。	細かく密で、砂粒をあまり含まない。焼成やや甘めで灰色。	左右対称復元。
2-7	須恵器环身。口 口径14.2。	口縁端部が軽く外反する。	同 上	細かく密で、砂粒を含む。焼成良好で青灰色。	
2-8	須恵器环身。口 口径12.8。	同 上	内・外面共に回転なで。	細かくややゆるめで、砂粒をあまり含まない。焼成やや甘めで淡青灰色を呈する。	左右対称復元。
3-1	壹形土器。 口径24.0。	大きく丸く外反する口縁をもち、二重口縁の段部は外方や下向きに、くつきりと突出する。頸部も丸く大きく内溝しており、体部も大きく丸い。	内面頸部より下は横方向のヘラ削りで、頸部以上に横方向のなでを施す。外面頸部より下に細かな刷毛調整の後、横方向への軽いなでを、頸部以上に横方向のなでを施す。頸部には刻突文を有する。	細かく密で、砂粒・石英片を含む。焼成良好。	外面頸部の刻突文は、全周にはめぐらない。左右対称復元。

No	器種・法量(cm)	成 形	調 整	胎 土・焼 成	備 考
3-2	壺形土器。 口径16.0。	大きく丸く外反する口 縁をもち、腹部は外方 やや下向きに丸く突出 する。頸部も大きくな りびれそうである。	口縁部内・外両方に横 方向のなでを施す。体 部内面はヘラ削りで、 外側には細かな刷毛目 がみられる。	同 上	外面頸部下半に「ノ」字 状の割突文かと思われ る痕跡があるが、固化 不能。体部の固化も不 能。左右対称復元。
3-3	脚部。 低径14.4。	底部は大きく、長く広 がっている。	外面上半に縱方向の刷 毛調整を、下半に縱方 向のヘラなでを施す。 内面下方に刷毛調整が 見られ、他は横方向の ヘラ削り。	同 上	左右対称、図上復元。 上部の形態は不明。
3-4	鼓形器台。 最小径11.0。	筒部のくびれは小さく、 段は鈍く、あまり突出 を見せない。	内面上半は横方向のヘ ラなで、下半は横方向 のヘラ削りを施す。外 面は横方向のなでが見 られる。	細かく密で、砂粒・石 英片を多く含む。焼成 良好。	外面がかなり風化をう けている。左右対称復 元。



第13図 小屋谷古墳出土土器実測図(1)



第14図 小屋谷古墳群出土土器実測図(2)

基、松本岩雄氏の編年による小谷式)にあたるものであり、大木権現山1号例は同じくⅣ期(小谷式)と思われる。また松本1号墳、日原6号墳例も共にV期のものであり、高島遺跡例、上東遺跡例は共に高島王泊五層(亀川上層式—藤田編年V期併行)のものである点より、小屋谷古墳群は藤田編年Ⅳ期もしくはV期のものと言える。ただし本古墳群の低脚環は脚部内面の内湾が大木権現山1号例より浅くゆるやかで、むしろ小谷墳墓例により近い点、V期の壺形土器をもつ点から見て、V期の可能性がより高いものと言えよう。

以上より、小屋谷古墳群の築造時期は、多少の変動の可能性は残しながらも藤田編年V期(小谷式)併行として妥当であろうと思われるのである。(房宗)

- (1) 近藤正 「安来平野における土壙墓」(『上代文化第36報』1966)
- (2) 石井慈 「大木権現山古墳群」 東出雲町教育委員会(1979)
- (3) 山本清 「山陰の土師器」(『山陰文化研究紀要6号』1965)
- (4) 近藤正、前島己基 「島根県松江市の塙土壙墓」(『考古学雑誌57-4』1972)
- (5) 山本清 「松本古墳調査報告書」島根県教育委員会(1965)
- (6) 小原貴樹 「日原6号墳発掘調査報告書」 米子市教育委員会(1978)
- (7) 柳浦俊一、圓山和男 「中竹矢遺跡1区」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書一Ⅲ一』 島根県教育委員会 1981)
- (8) 坪井清足 「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」(1956)
- (9) 藤田憲司 「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌64-4』 1979)  
P.56、No.21の土器。
- (10) 藤田憲司氏前掲論文
- (11) 前島己基、松本岩雄 「結語」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書一Ⅱ一』 島根県教育委員会 1977)
- (12) 坪井清足氏前掲報告書

## ま　と　め

小屋谷古墳群は、雨乞山から北へ伸びる標高62mの一支丘陵上に3基の方形墳から成る。いづれも丘陵尾根全体を利用し、丘陵を横断する溝等により3基に分け、祭祀跡1基を有している。主体部の方向は、ほぼ丘陵を横断する東西方向であり、地方面から掘込んでいた。祭祀跡は、3号墳を除いて丘陵と平行にとり、2号墳を除いて少ない封土中にあった。以下、各古墳の特徴をあげる。

1号墳 北側に造出し状のものを削出している。レベルからみると双方中方状を呈し、単純化した形にみると前方後方墳となり、いづれにしても村内唯一の墳形である。北側は、広大な平頂面を造っている。主体部は、中央部より南へ偏在し組合せ木棺を想定させる。壺棺は、主体部となり得るか不明である。箱式石棺は、1号墳

よりも新しい時期と考えられる。

2号墳 墳形は、方形である。主体部は、中央部に木棺直葬の2基が切合い関係にあるが、第一・主体部が古いと考えられる。

3号墳 墳形は、長方形である。主体部は、北に偏在して2基が隣接し、第一主体部は組合せ木棺で第二主体部より新しいが、副葬品を有していた。祭祀跡は、第一主体部上にはほぼ平行していた。北・東の墳裾には、明確な平担面を造っていた。2号墳より新しい。  
(宮本)

小幡谷古墳群は尾根上に築かれた3基の古墳からなる古墳群である。築造時期は、藤田編年V期（小谷式）併行及びその前後と思われるが、一基毎の明確な時期比定、古墳群の築造順は出土土器の性格、状況のため判明は出来ない。従ってここでは前期古墳であること、八雲村内では今までで最古の例であることの2点を挙げておく。

古墳群は丘陵尾根上の高所、2ヶ所に分かれて存在する。丘陵はかなり急な傾斜をもち、下方の水田からの比高は40mを越えている。また眺望は、東西線の南側は雨乞山の影響で見わたせないが、北側にはよく開けており、意宇川の流れを望み、山越えに現在の松江市部を見ることが出来る。このような立地は前期古墳に通有のものであると言えよう。

墳丘はいづれも削り出しが主体であり、盛り土はほとんど見られない。1号墳は前方後方形をなし、2号墳、3号墳は方形をなす。なお、1号墳については、双方中方形となる可能性を含んでいる。また前方後方形をなす。なお、もう一方に方形の加工壇が存在することは事実であり、何れにしても通常の墳形とは様相を異にするものと言えよう。今後の類例の増加が期待されるものである。

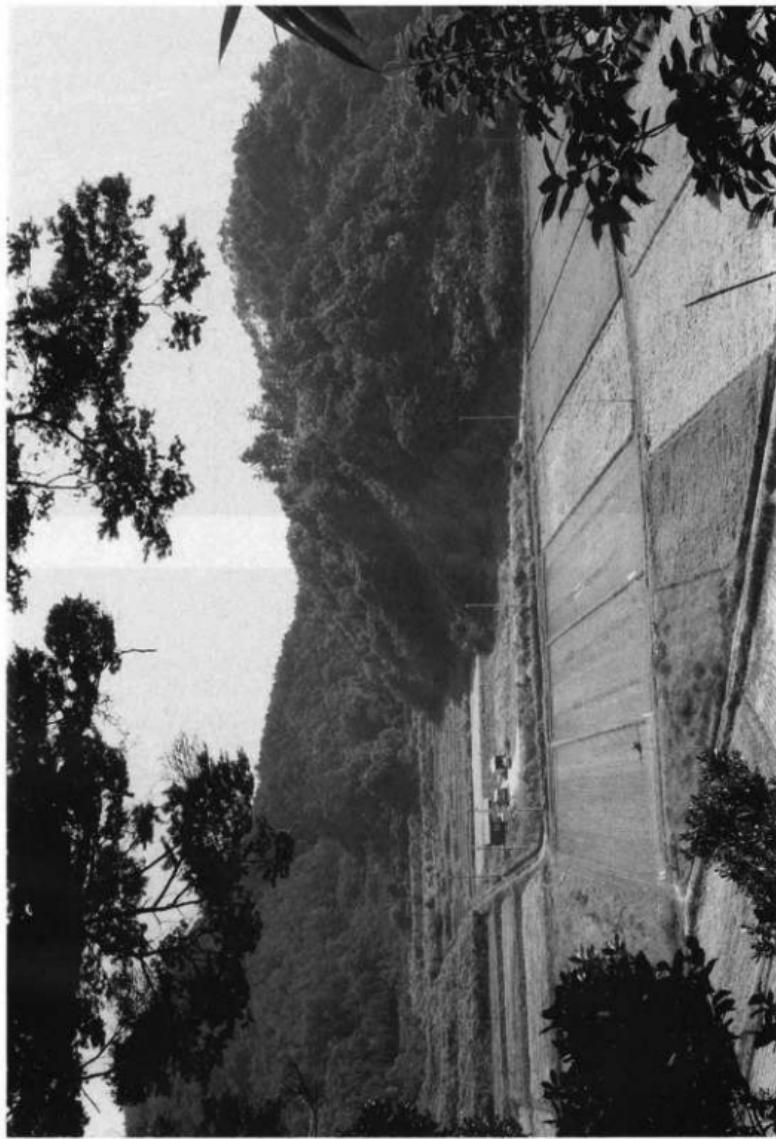
2号墳は方形ではあるが不定形なものであり、南北両側（尾根に直行する辺）を溝で区画したものである。3号墳も同様に南北両面を溝で区画しており、南側の溝を2号墳と共にしている。これは長方形をなすものであり、やはり整ったものとは言えまい。以上の3基を通じて、何れの墳丘もそれほど大きなものではない。

主体部は1号墳に土塙1、漆棺1、2号墳に土塙3、3号墳に土塙2が、そして1号墳の裾には小形の箱形石棺1が確認された。何れも何らの特別な埋葬施設をもたないもので、弥生時代からひき続いて存在する主体構造を有している。その中で3号墳の中心主体のみは大型で2段掘りのものである。また、それを含んだ2つの主体は隣接して、墳丘の北側に寄っている。このことの意味を明確にすることは出来ないが、あるいはそれ以前にも統けて埋葬を行なう計画があったのかも知れない。1～3号墳を通じて主体数は何れも少數であり、しかも中心主体は明確であると言えよう。

副葬品は、土器類に加えて3号墳中心主体の鏡、鉄器が存在する。3号墳には鏡の周辺に朱の散布が見られ、また出雲自生的ではない土器を含む点、注目されよう。その様相は典型的な前期古墳には程遠いが、上記の要素はその一部をなすものであり、前期古墳の何らかの影響下に造られた可能性が考えられるのである。なお鉄器は既に述べたように刀子であり、鏡については別に詳述した。

以上より小屋谷1～3号墳には、在地色をもった前期小形古墳との評価が下せるであろう。これは時期、様相共に小谷墳墓に類似したもので、古墳時代前期になってこのような小形古墳が出現する事実には注目すべきであろう。  
(房宗)

御崎谷道路・小屋谷古墳群遠景（北から）





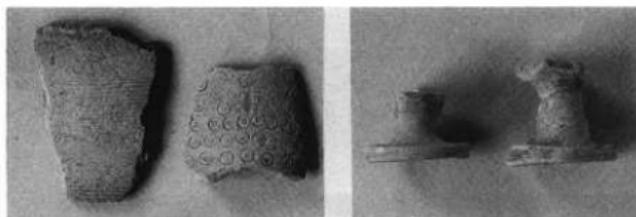
御崎谷遺跡発掘前（北西から）



御崎谷遺跡発掘後（北西から）

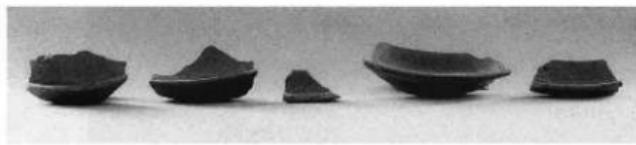


1 2

3 4  
5 6 12 13

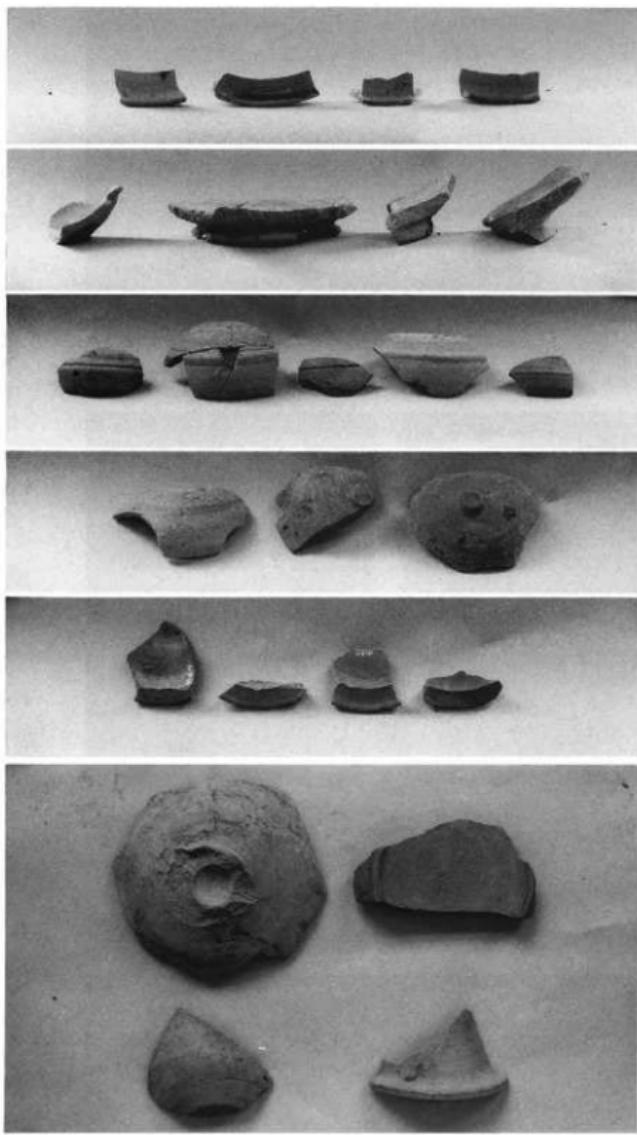
8 9

7 10 11

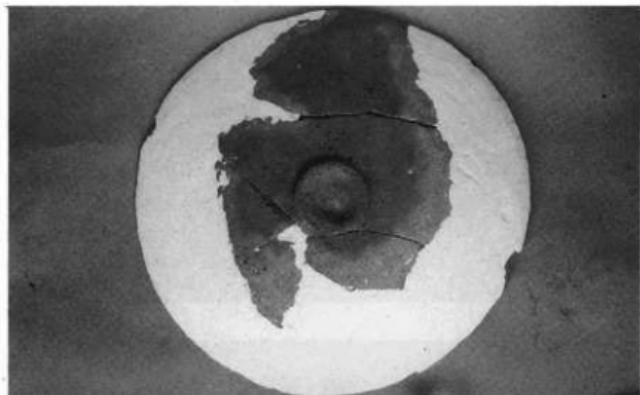


14 15 16 17 18

御崎谷遺跡出土 遺物(1)



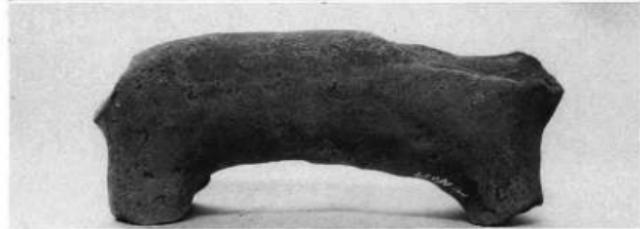
御崎谷遺跡出土 遺物2)



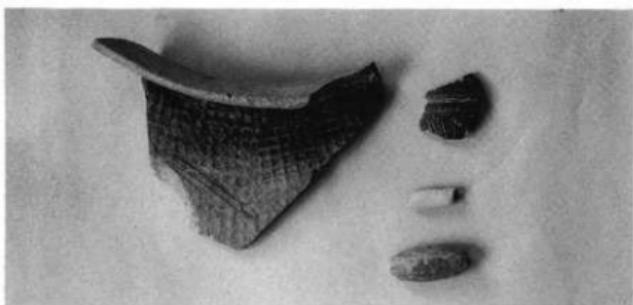
39



49



御崎谷遺跡出土 遺物(3)



45 40

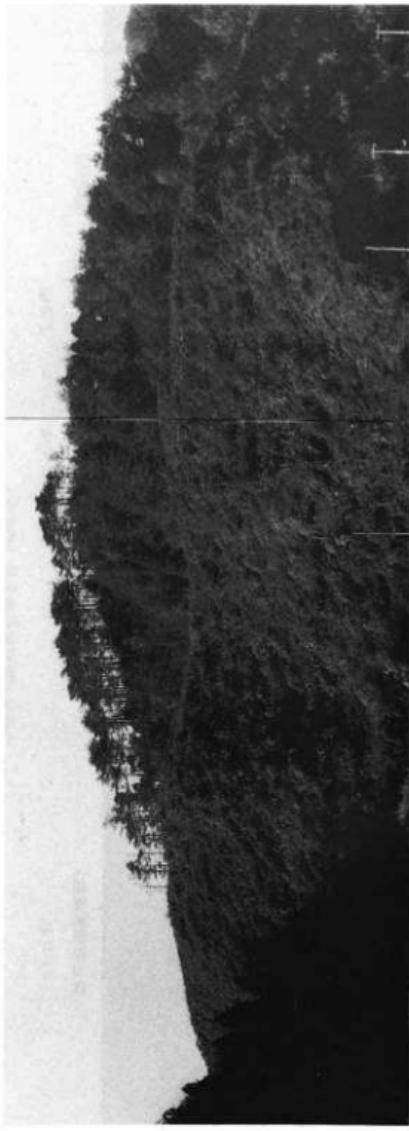
46

47



48

御崎谷遺跡出土 遺物4)



2号墳

3号墳

1号墳

小畠谷古墳群発掘前全景（東から）



(雨乞山)

(大谷古墳群)

(八雲西百塚古墳群)

1号墳

1号墳

3号墳

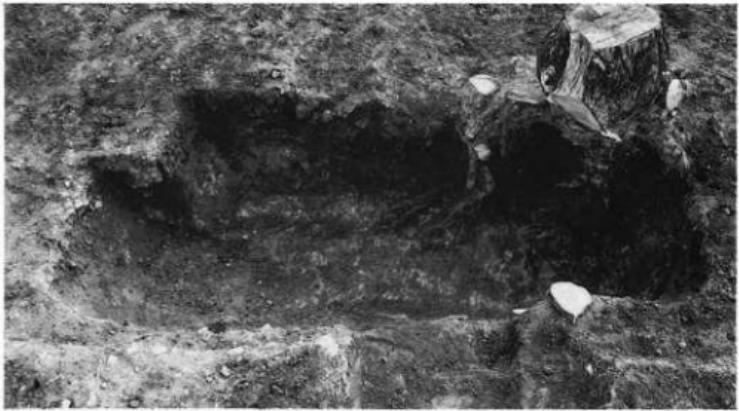
3号墳

2号墳

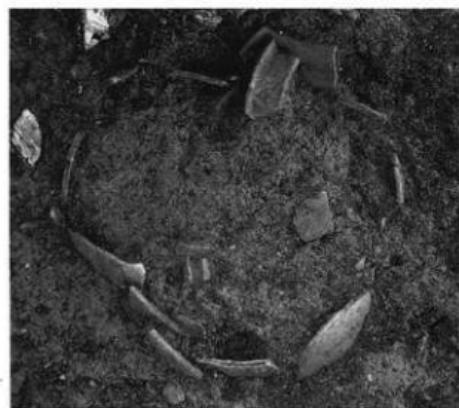
小屋谷古墳群発掘後全景（西から）



I (手前)・3号墳発掘前（北西から）



I号墳主体部（北西から）



壺棺 - 表土除去後 - (北西から)



壺棺底部 (北西から)



壺棺振り方 (北西から)



箱式石棺遠景（北から）



箱式石棺表土除去後（北東から）



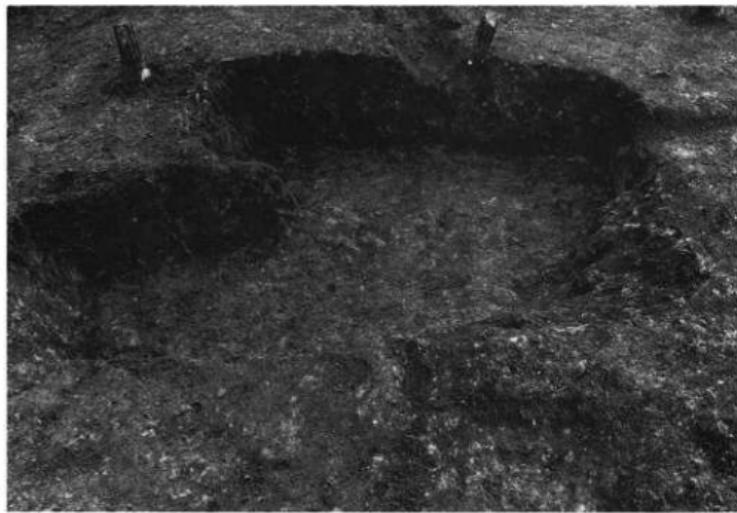
箱式石棺蓋石除去後（北東から）



箱式石棺掘り方（北東から）



2号墳発掘後（北西から）



2号墳第1(上)・第2主体部（北西から）



3号墳発掘前（北西から）



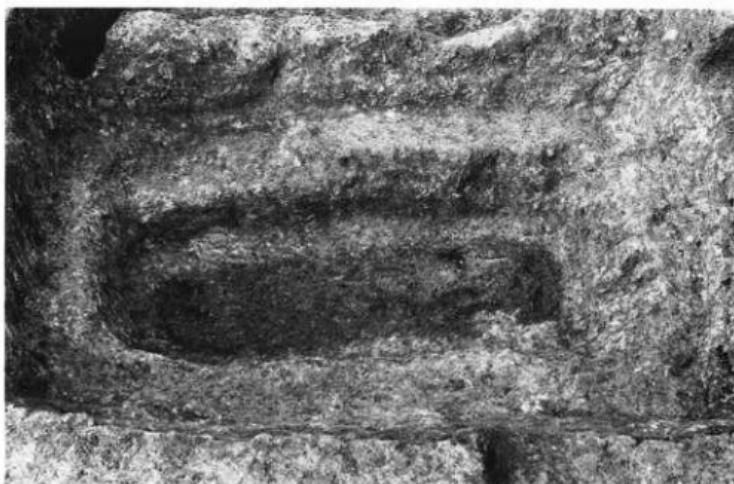
3号墳発掘後－主体部検出前－（北西から）



3号墳第1(手前)・2主体部(南東から)



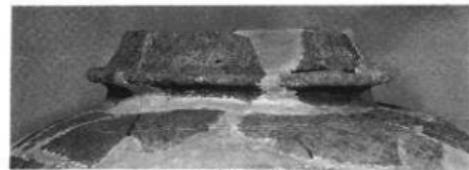
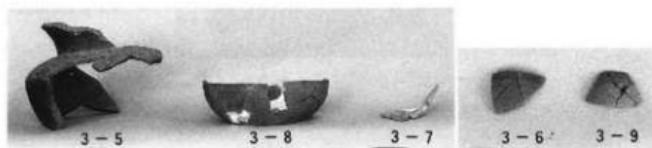
3号墳第1主体部遺物検出状況(北西から)



3号墳第Ⅰ主体部木棺部分検出状況（北西から）



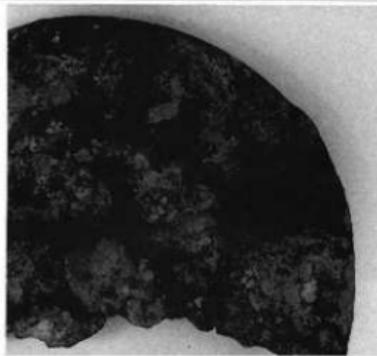
3号墳第Ⅰ主体部振り方加工痕検出状況



小屋谷古墳群出土 土師器・須恵器・壺



四蛇鏡背面



同上表面(布痕)



刀子



木片

小屋谷 3 号墳出土品



昭和56年3月15日印刷  
昭和56年3月31日発行

**御崎谷遺跡・小屋谷古墳群**

発行 八雲村教育委員会  
印刷 報光社